
燃えよ魂 ～ 緋弾のARIA～

夢見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

燃えよ魂 ～緋弾のアリア～

【Nコード】

N0329T

【作者名】

夢見

【あらすじ】

沖田勇士は鑑識科のAランク武偵。普通の日常を送っていたが、流れでキンジとアリアの運命に巻きこまれていく。そして、勇士自身の運命も少しずつ動いていく。基本、原作沿いです。超遅筆ですが、よろしく願います

弾籠め1（前書き）

二次創作、始めました。

原作は緋弾のアリアです。

よろしくお願いします。

弾籠め1

——空から女の子が降ってくると思うか？

昨日見た映画では降って来てたんだ。

まあ、映画とかマンガならいい導入かもな。

それは不思議で特別なことが起こるプロローグ。

主人公は正義の味方にでもなつて、大冒険が始まる。

ああ、だからまずは空から女の子が降ってきてほしい！

……なんて言うのは浅はかってモンだぜ。

だってそんな子、普通なわけがない。

普通じゃない世界に連れ込まれ、正義の味方に仕立てられるんだ。

それに、人を守るってのはそう簡単なことじゃないんだ。

圧倒的な強さが必要になる。

だから少なくとも俺、沖田勇司は——

空から女の子なんて降ってこなくていい。

今は、まだ。

俺はもっともつと強くならなければならぬ。

それが、俺の義務だと思うから……

弾籠め2

勇士 side

「おい。キンジー。起つきろ」

俺は、ベットの上で幸せそうな寝顔を見せているキンジの体をゆすってみる。起きる気配がない。ちくしょう。俺だってもうちよい寝ていたかったのに、朝の実習のせいで、嫌々早く起きたんだぞ。それなのに、こいつときたら……

これは罰を与えなければならんな。

俺はキンジの耳元にそつと近づき、囁く。

「裸のお姉さんが、目の前にわんさかさつさ」

「うわあああああああああああああつ」

お、起きた。

「おはよう。キンジ」

「お、おう。勇士か。な、なんか今、目の前に悪夢のような、パラダイスのようなイメージが映ったんだが……」

それはまた奇特な状況だな。まあ、起きてくれてよかったよかった。

「あれ、なんで勇士、もう制服着てんの？」

「……はあ。昨日の夜話しただろ。実習があるから先に行くって」

「あ、ああ。そういえば、言ってたな。そんなこと。」

まったく。この男ときたら。相変わらずの怠惰ぶりだな。以前の面影もない。

「大変だな、鑑識科^{レイア}も。しかも、お前の場合は……」

「キンジ」

「あ、スマン」

それ以上は言わない約束でしょ。なんてな。ま、色々あるんですよ。

キンジと俺は東京武偵高に通う2年生。正確には、今日から2年生。俺は鑑識科^{レヒア}に、キンジは探偵科^{インケスタ}に属している。キンジとは、幼馴染という関係で、昔からの付き合い。当然、キンジの体のことも知っている。キンジの来年から一般高に通いたいという意志も。

さて、キンジも起こしたことだし、俺はもう学校に行くか。防弾制服と、帯剣、帯銃、よし。俺は玄関に向かって歩き出す……

……ピン、ポーン……

どうやら、誰か来たみたいだな。こんな時間に、この部屋を訪ねてくる人物。しかもこの慎ましいチャイムの鳴らしかた……嫌な予感がする。

ドアの覗き穴から、外を見た。
すると、そこに——やっぱり。

「……はあ」

——白雪が、立っていた。

武偵高の制服をきて、せつせと前髪を直している。

思いつきり恋する乙女って感じだよなあ。

まあ、相手がああ超鈍感男、タラシの帝王、遠山キンジだっていうのは、ちょっと気の毒だが。

「何か、お前、失礼なこと考えてないか？」

そんなことを考えていると、制服に着替えたキンジが玄関にやってきた。勘のいいやつだな。

それと、羨ましいぞ。こんな可愛い子に好かれて。幼馴染という立場では変わらないはずなんだけどなあ。

「白雪が来たみたいだぞ。」

「……？」

そんな声ださなくても。ま、気持ちは分からなくもないけどさ。まあ、こうしていても仕方ない。とりあえずドア開けるか。

——ガチャ

「白雪」

ドアを開けると、白雪は慌ててコンパクトをとじ、サッと隠す。

「キンち——」

パアッと明るくなった顔が少し落胆の色が混じった顔に変わった。そんなあからさまにガツカリしなくても……少し凹むぜ。

「おはよう。勇士君」

ガツカリした顔が一瞬でニッコリスマイルになると、白雪は優等生らしく、折り目正しく挨拶してくる。

「おはよう。白雪。昨日まで伊勢にいたんだっけ？ 大変だな、朝早くから」

「うん。でも全然大変なんかじゃないよ」

ははっ。この屈託のない笑顔を見てるとなあ。笑えてくる

「白雪」

奥からキンジが出てくる。

「キンちゃん！」

その顔が花が咲いたようにパアッと輝く。

白雪はキンジと向かい合っているときはホントいい顔してるよな

「その呼び方、やめろっていったろ」

「あっ……ごっ、ごめんね。でも私……キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんを見たらつい、あっ、私またキンちゃんって……ご、ごめんね、ごめんねキンちゃん、あっ」

……怒る気も失せるよな。まったく。

キンジのほうをみると、キンジも何かを諦めたような、苦笑いのような表情をしている。

星伽白雪。

キンちゃんという呼び方で分かるように、キンジと白雪は幼馴染だ。よって、俺とも幼馴染ということになる。なるのだが……

高校入学の頃からだろうか。白雪のキンジに対する態度が特に変化したのは。以前からそのような兆候はあったが、好意を表に出すようになったのはその頃からだろう。

まあもつとも。キンジ自身が気付いているのか否かよくわかっていないのだが……

……気付いてねえだろうな、あの朴念仁は。

「ていうか、ここは仮にも男子寮だぞ。よくないぞ、軽々しく来るのは」

「で、でも。私、昨日までキンちゃんのお世話何もできなかったから」

白雪がちよっと泣きそうな顔になる

「こら、キンジ。わざわざ来てくれたんだから、その言い方はないだろ。じゅあ、キンジ、白雪。俺はもう行くからな。あとはお二人でこゆつくり」

「ふ、ふたりで……ゆゆゆ、ゆつく、くり」

俺がそう言つと、白雪は途端に顔を赤くしてしまった。

さて、これ以上は本当に邪魔だな。そろそろ行こつ。

side out

キンジ side

「ねえ、キンちゃん。勇士君、まだ駄目なの？」

白雪が持つてきてくれたお重を食べていると、白雪が尋ねてきた。駄目、というのも勇士は一年のときは強襲科のSランク武偵だったのだ。それが、一年の終わりにある事件がきっかけで、怪我をしてしまった。

そのとき、以前から目を付けていた鑑識科が勇士をひっぱったのだ。勇士の鑑識能力は俺から見ても一流のものだしな。

「いや、体の方はもう大丈夫だと思う。後は心の問題だな」

その時の事件で勇士は大分傷ついた。体も、心も。本人はもうふっきった様子を見せてはいるが、実際のところはどうかだろうな。

「私は……もう一度みたいな。キンちゃんと勇士君のコンビ。カッコよかったなあ……あの時のキンちゃん……」

白雪がトリップしてしまったところで、俺はお重を食べ終わった。軽くお礼を言うと、白雪は途端に慌てはじめた。その時に下着が見えてしまったりして、少し、危うかったが……

「キンちゃん、はい、防弾制服」

「始業式くらい、いいだろ」

「駄目だよ、キンちゃん。校則なんだから」

校則……『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける』、か。

これを、聞いただけでわからだろ？ 武偵高がいかにも普通じゃないかが。

「それに、『武偵殺し』みたいなのも、またでるかもしれないし……」

……

「武偵殺し？」

「ほら、あの、年明けに周知メールが出た連続殺人犯のこと」

そつえば、あったな。そんなのも……

まあ、白雪は心配して来てくれたんだし、これ以上迷惑かけるわけにはいかないか。

俺は、バタフライ・ナイフを棚から出してポケットに収める。

「かつこいいよ、キンちゃん。やっぱり先祖代々の『正義の味方』ってカンジだよ」

「やめてくれよ。ガキじゃあるまいし」

「俺はメールをチェックしてから出るから、先に行つててくれ」

「じゃあ、洗濯とか、台所とか……」

「いいからっ」

尚も世話を焼こうとする白雪を部屋から締め出すと、俺はパソコンの前に座る。

くだらだら……と、メールやWebをみていると、いつの間にか時刻は7時55分をさしていた。

これは58分のバスには乗り遅れたな。

——生涯。

生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろう

s
i
d
e

o
u
t

L a b a m b i n a d a 1、A R I A 1

キンジ side

ちくしょう。

ちくしょう。

なんで俺が。

なんでこんなことに。

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります。」

奇妙な——チラシを切り貼りしてつくった脅迫文みたいな、妙な
声。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しやが
ります」

——爆弾……だ？

混乱する頭でチャリをあちこちまざぐると——サドルの裏に、い
つの間にか変なものが仕掛けられていた。落ち着け、落ち着け、と
自分に言い聞かせながら指でなぞる。

——やばい。型^{タイプ}までは分らないが、どうやらC4らしい。そ
れもこの大きさ。自転車どころか自動車だって跡形なく消しとばせ
るサイズだぞ。

——マジかよ——

すると、いつの間にか俺の自転車には妙な物体が併走してきてい
た。

車輪を2つ平行に並べただけで器用に走る、タイヤつきの力カシ

みたいな乗り物。

こいつは……むかしテレビで見たことがあるぞ。
『セグウェイ』とかいう乗り物だ。

その銃座から俺を見つめる、銃口。

UZI。

秒間10発の9ミリパラベラム弾をブツ放す、イスラエルIMI社の傑作短機関銃だ。

やられた。直感で分かる。こいつはたぶんイタズラじゃない。
ハメられた。なんてこった。チャリを乗っ取られた。

——世にも珍しい、チャリジャックじゃないか！

俺は第2グラウンドへ向かう。

金網越しに見た朝の第2グラウンドには、いつも通り誰もいない
俺は仕方なしにその入口めがけてチャリをこぐ。

ていうか、この手口。白雪が言ってた『武偵殺し』の模倣犯じゃ
ねえか。

——どうすればいいんだよ！？

その時、第2グラウンドに入ったところで、併走していたセグウ
エイがバランスを崩し始めた。やがて、グラグラと揺れ始め、そし
て、視界の後方に消えていく。

な、何か知らんがー安心だ。

じゃない！

爆弾の方はまだ何も解決してねえ！

クソッ もう足がパンパンになってきた。

俺は。

死ヌノカ。

コンナ所デ。

その時だった。俺はこのありえない状況の中、さらにあり得ないものを見た

女子寮の屋上の縁に1人の女の子が立っていたのだ。

遠目にも分かる、長い、ピンクのツインテール。

彼女は——有明の白い月をまたぐようにして、飛び降りた。

飛び降りた！？

事前に屋上で滑空準備させてあったらしいパラグライダーを、空に広げている。

そして、あるうことがこちらに近づいてくる！？

「バツ、バカ！ 来るな！ この自転車には爆弾が——」

俺のそんな叫びもむなしく、俺の真上に陣取った彼女は……げしっ！

白いスニーカーの足で、俺の脳天を力いっぱい踏みつけてきた

「武偵憲章1条！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ！」

彼女はそう言うと、ブレークコードのハンドルにつま先を突っ込み、逆さぶりの姿勢になった。

そのまま凄いスピードでまっすぐ飛んでくる。

「——マジかよ……！」

こうなったらもう仕方ねえ。やるしかない。

俺はアイツに、アイツは俺に近づいていく。

2人の距離がみるみる縮まっていく。

ああ、昨日見たアニメ映画にこういうシーンがあったな。

——でもあれ、男と女が逆じゃなかったじゃか！？

そう自分にツッコんだ瞬間、俺は少女と抱き合った。

そして、そのまま空にさらわれる。

彼女の下っ腹からは、クチナシの蕾のような、甘酸っぱい香りがして——

ドガアアアアアアアアアアアンツツツ！！！！

閃光と轟音、続いて爆風。

俺が乗り捨てたチャリが爆発した。

そして、俺たちは勢いそのまま、爆風にも煽られ、体育倉庫に飛び込んで行った

side out

勇士 side

実習が意外と早くすみ、俺は教室でキンジの到着を待っていた。
この時間に来ないってことは……あいつ、58分のバスに乗り遅れたな。

つたく……白雪がついていながら……

始業式には間に合うといいんだが……ん？

教室の窓から外を見ると、誰かがすごい勢いで第2グラウンドへ走り込んできた。チャリで。

何だ、朝から騒がしい……ってキンジじゃねえか！？

よくよく見ると自転車をこいでいるのはキンジで、何か……カカシみたいな乗り物が併走している。

んで、上には……UZIか。

どうやら厄介事らしいな。この手口からすると、例の『武偵殺し』の模倣犯か……

とりあえず……

俺は懷から小型ナイフを取り出すと肩口に構える。

目標までは約70メートル。

俺は構えたナイフをそのままUZIめがけて投擲した。

ヒュン

俺の手から放たれたナイフは『セグウェイ』めがけて一直線。もくろみ通り、セグウェイはバランスを崩して、大破した。

しかし、キンジはこぐことをやめない。くそっ どうやら爆弾を

仕掛けられたらしいな。

どうする、どうにかして……

そんなことを考えていると、向かいの建物……女子寮の屋上に女の子が立っているのがみえた。遠目でも見えるピンクのツインテール。小柄な体型。

確かに見覚えがあるその女の子はそこから飛び降りた。

「！？　おい！？」

突然の出来事に驚いていると、パラグライダーを広げた。

ま、まさか。それで助けるつもりか。

一瞬の出来事だった。まさに一瞬の救出劇。

そのまま2人抱き合ったまま、倉庫に突っ込んでいく。

俺はしばし呆然としていたが、すぐに、体育倉庫に向かって駆け

出した――

L a b a m b i n a d a 1、A R I A 2

俺は体育倉庫で痴漢の現場に遭遇した。

「き、キンジ」

「！ ゆ、勇士！」

声をかけるとキンジは驚いたようにこちらを振り向く。

今、キンジはさっきの女の子を抱っこした状態で跳び箱にはまっていた。そこまではいい、そこまではいいのだが……

「……へ……へ……」

「——？」

「ヘンタイ——————！」

な、なんとキンジはその女の子のブラウスを首までたくしあげ、下着をあらわにしていたのだ！

当然激昂した女の子はキンジに殴りかかっていた。しかし、なんというか、可愛い声だな。アニメ声というか、鼻にかかった、外見とよくマッチした幼い声だ。

「キンジ、お前。いつか、やるやるとは思っていたが……」

「っておい！ 勇士！ お前も敵なのか！？」

俺が神妙な表情でうなだれると、キンジはすぐるような眼を向けてきた。見るな、この犯罪者め。

「そのあんた！ あんたもみたでしょ！ この男の狼藉を！」
狼藉って……

「ああ、しかと見た。まさか俺の親友が犯罪に手を染めるとはな……

……」

「—— お前ら！ 俺の話を聞け！ こ、これは、俺が、やったんじゃない、な——！」

キンジがそこまで、殴られつつ言った時。

——ガガガガガガガンッ！！

突然の轟音が、体育倉庫に響き渡る

「「「！」「」」」

咄嗟に俺は横っ跳びで死角に飛ぶ。ここならどれだけ撃たれようともあたらない。

物陰から伺うとさっきのセグウェイが1、2……7台いる。
まあ、7台程度だったら何とか……

ババババッ！

「！」

何事かと音の出所を伺うと、さっきの女の子が応射している。

「お、おい。やめろ！俺が何——」

「あんたも——ほら！戦いなさいよ！仮にも武偵高の生徒でしょ！」

「むッ、ムリだって！どうすりゃいいんだよ！」

「これじゃあ火力負けする！向こうは7台いるわ！」

聞こえちゃいねー

いやいや、どうする。あの子の弾切れを待つしかねえか？
でも、あれだけの射撃の腕なら、再装填も速そうだし……
そんなことを考えていると、

ガガガキンッ

弾切れの音。しめたっ
この隙に……

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」

聞きなれた声音。そう、強襲科でこいつと組んでいたときはよく
聞いていた声音。

「ご褒美に、ちょっとの間だけ——お姫様にしてあげよう」

相も変わらずキザったらしい声だねえ。

キンジはそう言っと、いきなりお姫様抱っこをしている。
ぼんっ

お、赤くなった。

キンジはそのまま倉庫の端まで一足で跳ぶ。

そして、一言、三言かけた後、こちらに歩いてくる。
「よう、キンジ。なっちまったのか」

「なんのことだ？ 勇士？」

とぼけるか。まあ、当然と言えば当然だな

ズガガガガガンッ！

再び、UZIが体育倉庫に銃弾を浴びせてくる。

「あ、危ない！ 撃たれるわ！」

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

アリア……ああ、確かそんな名前だったな

「だ、だ、だから！ さっきから急にキャラ変えてんのよ！
何をするの！」

俺たちは同時に振り返って混乱しまくりのアリアに――

「「アリアを守る」」

「久しぶりだなあ、キンジ。お前とこうして組むのも」

「そうだな、懐かしいな。勇士」

「俺は左の3台をやる。キンジは右の4台を頼む」

「了解」

俺は背中から刀を取り出す。

『菊一文字則宗』

鞘から引き抜いた瞬間、その刀は光を発しているように見える。

2人そろって、ドアの外へ身を晒した。

グラウンドに並んだ7台のセグウェイが、一斉に撃ってくる。

その弾は――当たるわけがない。

俺とキンジはそろって映画『マトリックス』のように、銃弾を避けた

と、同時に俺は左の3台に向かって大きく右足を踏みこむ。踏みこみは一度。刺突も一度。

しかし、俺の目の前には3台のセグウェイがきれいに真つ二つになっていた。

ふう。あつさりしすぎてて手応えねえな。

キンジの方もみると、4台のセグウェイをあつさり倒していた。

体育倉庫の中に戻ると、アリアは『今、私の目の前でなにが起きたの?』という顔をしている。

そしてキンジと目が合うと、ぎろー! と睨み目になって、跳び箱の中へ引っ込んでしまった。

……あーあ、大分嫌われてるぞ。キンジ。

キンジが跳び箱の中にベルトを投げ入れると、ふわりと飛び出てきた。

身長145あるかないかってところか……小せー

アリアは立ち上がると、キンジにかみつく勢いで、迫ってくる

「あ、あんた、あ、あたしが気絶しているスキに、ふ、服をぬ、ぬぬ、ぬがそうとしてたじゃない!」

「確かに」

「それは誤解だよ」

キンジが困ったような表情で応える。

まあ、そりゃそうか。っていうか、からかってばかりじゃなくて、そろそろフォローしとかないと、面倒になりそうだな。

「よし冷静に考えよう。俺は高校生。アリアは中学生だ。いくらなんでも中学生を脱がしたりはしない」

と、思ったけどやっぱやめた。こいつ、バカだ。

アリアは俺と強襲科で入れ違いになった子だ。俺が強襲科から移ってすぐ、凄腕の女子生徒が入ったと聞いたことがある。

名は神埼アリア。

「！？ あたしは中学生じゃない！」

当然のごとく怒りだすアリア。

この体型だからな。今までも何度か子供扱いされたこともあるんだろう。だからこそ、嫌なんだろう。子供に見られるってのは。

「悪かったよ」

お、気付いたか？

「インターンで入ってきた小学生だったんだな。しかし凄いな、アリアちゃんは——」

あ、やっちゃったぜ、この人。お前の脳みそにびっくりだ。

見ると、アリアはプルプル震えている

「こんなヤツ……こんなヤツ……助けるんじゃ、なかった!!」

ばぎゅぎゅん!

「うおっ」「」

足元に撃ちこまれた銃弾に俺は咄嗟に後ろに体を投げ出す。

「あたしは高2だ！」

尚も発砲しようとするアリアにキンジは逆に近づいて、取っ組み合うような姿勢になった。

「——んっ——やあっ！」

アリアは柔道の跳ね腰みたいな技で、キンジを投げ飛ばした。バリツか……やるな。

キンジはそのまま受け身を取りつつ体育倉庫の外に転がりでてくる俺はその隙に懐からとりだしたパチンコ玉をはじく。

パシッパシッ

見事それはアリアの両手に命中し、アリアは拳銃を取り落とす。

「もう！ 許さない！ ひざまずいて泣いて謝っても、許さない！」

そして、セーラー服の背中に手を突っ込み——

じゃきじゃき！

そこに隠していた刀を二刀流で抜いた。

「勇士！」

「おうよ！」

アリアはキンジの両肩めがけて流星みたいに突き出してくる。

キンッ

俺はそこに割って入り、下から則宗を走らせ、アリアの刀を2本とも上に軌道をずらした。

アリアは、刀の腕は拳銃ほどうまくない。刀にまだ振られている

感があるな。

「！！」

自分の刀をはじめたことに驚いているのか、アリアの顔に、少し動揺が走る。

バチィッ

アリアが二刀流を交差した状態でとびかかってくる。俺はそれを峰でうけ、つばぜり合いに持ち込む。そのまま、腰を左にずらして

ガチィッ

少しバランスを崩したアリアを右側にはじきとばしてやった。

「うきやあッ」

とばされたアリアはさらにキンジがばらまいておいた銃弾をふんでひっくり返っている。

「よし、逃げるぞ、キンジ！」

「おう！」

ヒステリアモードのキンジと俺が組んだら誰も捕まえることなんてできないさ。

そう思いながら俺は、背中で、彼女の捨てゼリフを聞き流すのだ。つた。

「この卑怯者！ でっかい風穴——あけてやるんだからあ！」

これが俺、沖田勇士と遠山キンジが、後に、『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアと出会ったことの顛末である。

神埼・H・アリア 1

勇士 side

俺が神埼・H・アリアについて知っていることと言えば、強襲科の2年であり、俺と入れ違いに強襲科に入った。ということぐらいである。

後は、2丁拳銃に、二刀流。銃刀ともに、腕前は超一流。武偵ラックもSらしい。

俺も、噂だけは聞いていたが、実際に見るのは初めてに等しい。あんなにちっこいとは知らなかったし、あんなに感情的だということも、知らなかった。

俺とキンジは教務科^{マスターズ}に事件の報告をした後、教室に向かってトボと歩いていった。結局、始業式には出られなかったな。

「うわあゝ。またやつちまったよ……」

「まあまあ。元気出せて。俺は久しぶりにキンジと組めて楽しかったぞ」

さっきから鬱々としたオーラをまとっている、キンジを俺は一生

懸命慰めていた。そんなに落ち込まなくてもいいんじゃないかな……

「それにしても……キンジ、アリアでヒスっちゃうのか。ああいうタイプが好きだったんだ。意外だな」

「！？　んなつ！？　そんなわけねえだろ！」

「おうおう、照れちゃって。別に隠すことでもないだろ」

「だから、ちげえって……別に俺の意志じゃねえんだからよ」

ヒステリアモードはキンジ曰く、自分の制御で発動、抑制などとはできないらしい。でも、長い付き合いの俺は分かる。キンジは自分の好きなタイプの女の子だと、なりやすい。体は正直ってヤツだ。本人は認めないだろうけどな。案外、ストライクゾーンと真ん中なんじゃないだろうか。

始業時間ぎりぎりで教室に入ると、すでにそこには、ほとんどの生徒が揃っていた。

俺は自分の席（キンジの席は一つ前）に座ると、タイミングを見計らったように、前の扉が開いて、担任の先生が入ってきた。

「はい。今日から2年生ですね。気を引き締めてがんばりましょう」

決まり文句だな。

「では。じゃあまずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」

うんうん。……………ん？

すっげえ嫌な予感。

ガタンッ

教室の一番右前に座っていた女の子が立ち上がる。

ピンクのツインテール。

145ない身長。

見間違っことはない。神埼・H・アリアその人である。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

そして、ピンクのツインテールは俺の目の前の人物、遠山キンジを指さして、そう言い放った。

教室の全生徒は一瞬絶句した後、ぐりっところちを向き、

わぁーっ！と歓声を上げた。

キンジは――

ずりっ、とイスから転げ落ちている。

「よ………良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席変わりますよ！」

ガタツと勢いよく立ち上がった大男は、武藤剛氣。車軸科クルマの優等生で、スクーターからロケットまで、乗り物と名のつくものなら、何でも運転できる特技を持つ。俺も強襲科にいたときに、何度も現場まで運んでもらったことがある。

案の定、キンジは慌てた様子で武藤に行くな、という視線を送っている。

何か、「違うんだあ………」って呪詛のように言い続けてるし……

ついに、教室内に拍手喝さいが始まった。

俺？　俺はもちろん……

「ひゅー、ひゅー。よ、色男！　モテル男は違うねえ！」

煽りに煽っていた。

こんな面白い状況。さらに面白くしなくて、どうすんねん！

「キンジ、これ、さっきのベルト」

アリアがさっきキンジが貸したベルトを投げ返す。キンジがベルトをキャッチすると、

「理子分かった！　分かっちゃった！　——これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

俺の隣に座っていた、峰理子が、ガタンと席を立った。理子は探偵科のAランク武偵で、俺が強襲科にいたときに、よくパートナーを組んでいた。

情報収集能力にだけ、俺も信頼している仲間の一人だ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり2人は——熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

「そうか、一昨日の夜、キンジが部屋にいなかったのはそういうことだったのか……キンジは大人の階段を上っちまったんだな……」

俺は理子に便乗して、場を煽る。

当然のごとく、場は喧々囂々。

大盛り上がり、盛り上がってしまった。

「き、キンジがこんなカワイイ子と一つの間に!？」「影の薄いヤツだと思ってたのに!」

「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを!」「フケツ!」

おーおー。息ピツたしだな、お前ら。

キンジが頭を抱えて、机に突っ伏したところで、

ずぎゅぎゅん!

鳴り響いた2連発の銃声が、クラスを一気に凍り付かせた。

——真っ赤になったアリアが例の2丁拳銃を抜きざまに撃つたのである。

「れ、恋愛だなんて……くっだらない!」

チンチンチーン……

拳銃から排出された空薬莖が床に落ちて、静けさがさらに際立つ。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことを言うヤツには……」

それが、神崎・H・アリアが武偵高のみんなに発した——最初
のセリフだった。

「——風穴あけるわよ！」

神崎・H・アリアとの邂逅後、俺は放課後に、チャリジャックに
関する調査レポートをまとめていた。

俺は今は、鑑識科にいるものの、いつかは強襲科に戻るつもりでい
る。

だが、鑑識科について、手は抜けない。何か見落としているものは
ないかと考えているうちに、結構な時間になっていた。

俺は、寮までのバスに乗り、近くのコンビニで、お茶を買って寮
に帰った。

そして、自分の部屋を目指して歩いて行くと……ん？

俺の部屋、ドア開いてねえか？

「か、神埼!？」

キンジの慌てた声が聞こえる。

神埼だ!？

俺は慌てて部屋の前まで猛ダッシュ。そして、中を覗くと……

いた。いらつしやった。ピンクのツインテールに、ストライプ柄の高級そうなトランク。

って、トランク!？　おいおい、まさか

「あら、あんたも、帰ったの。あんたも、私のことはアリアでいいわよ」

玄関先に突っ立っていた俺に神埼は振り向くと、そう言った。

そして、言うが早いのか、ケンケン混じりで靴を玄関に脱ぎ散らかし、俺の部屋に侵入してしまった。

「お、おい」

キンジがそれをとめようとするが、あえなく失敗。

「トランクを中に運んどきなさい!　ねえ、トイレどこ?」

俺たちの話なんてどこ吹く風。アリアは目ざとくトイレを発見すると、てててつ、ばたん。入っていつてしまった。

「キンジ、お前。尾^つけられてんじゃねーよ」

「う、すまん」

おそらくアリアは武偵高からここまでキンジを尾行してきたんだろつ。

尾行の腕も上等みたいだな。

「で、どうするっ。」

「どうするって……とりあえず、話だけでも聞いてみるっきゃないだろ」

俺がトランクを中に運び入れながら、キンジに答える。

「あんたたち、この部屋2人で使ってたの？」

トイレからでてきたアリアがそんなことを聞いてくる。この部屋は、本来四人部屋なのだが、まあ諸事情で俺とキンジの2人だけで使っている。

アリアは手を洗った後、部屋の奥、リビングの窓際あたりまで進んでいった。

「まあ、いいわ」

何が、いいんだろうか。
くるっ

アリアは窓に背を向けてこちらに向き直る。
そして、夕陽を背に浴びながら……

「キンジ、勇士。あんたたち、あたしのドレイになりなさい！」

……
……
えー。

突然何を言い出すんだこの子は。奴隷制度は日本では江戸時代に

とつくに終わってることを知らないのだろうか。

「ほら！ さつさと飲み物ぐらい出しなさいよ！ 無礼なヤツらね！」

お前にだけは言われたくないぞ。無礼って……

ソファに座った瞬間にガンチラした。帯銃してんのか……

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！ 砂糖はカンナ！ 一分以内！」

本当に無礼なヤツだ。

っていつかこの部屋にコーヒーなんてねえよ。俺は紅茶党なんだ。

アッサムで淹れたミルクティーをアリアの前に差し出すと、怪訝そうな顔をした。うちには紅茶しかないんです。我慢してください。が、アリアはミルクティーを一口すると、その赤紫色カメリアの目をパツと輝かせて、驚いたような声を上げた。

「おいしいわ。私、あんまり紅茶って好きじゃないんだけど、このミルクティーは今まで飲んだ中で一番おいしい。褒めてあげるわ、勇士」

ニコツとアリアが笑う。台詞はアレだが、笑顔はなかなかいいじやん。そう言う顔を普段から見せてれば、学校であんなに嫌われることもないだろうにな。

その後、アリアがお腹すいた。といいだし、松本屋にキンジとアリアの2人で買い出しにいった。アリアはももまん？ を七個も買ったみたいだが……

そして、まあ案の定というか、得てしてというか、言い争いになる2人。ま、アリアが感情的に喋って、それに対抗してキンジも感情的になってるんだから、当然か。

んで、なぜかキンジは部屋を締め出されたらしい。弱っ

「私、お風呂はいるから。覗いたら殺すわよ」

アリアはそう言っ^て脱衣所に入^っていく。覗かねえよ。キンジじやあるまいし。

そう思いながら本を読んで時間を潰していると、キンジが帰ってきた。

「よう、お帰り」

「おう。アリアは？」

「風呂」

「風呂！？」

「ああ。完全に住み着く気だな、アイツ」

なんてこった。といったようにキンジが頭を抱えていると、

ピン、ポーン……

こ、この鳴らし方はっああ……

（し、白雪か）

まあ、問題ない。居留守を使えば……

ドンッ

バカーーーーー……………何故敬語!?

「あー俺、風呂上がりだからさ。きつと風呂の水滴が落ちた音だろ」

俺の決死のフォロー。

「ふうん、キンちゃん。私に隠してることない？」

「ないない、隠し事なんてありあ、じゃない、ありえねーから」

もう、ボロボロだ。お前、やっぱ探偵科には向かねえよ。

「…………そう。よかった」

そう言って白雪は出ていった。

よ、良かった…………盲信的で本当によかった。

まあ、ばれたときの反動は大きくなったけど。

俺がほっと一息ついていっていると、キンジが凄い顔してこちらに駆け
てきた。

そして、呼び止める間もなく、脱衣所に入る。

「おいおい、本当に覗く気かよ!？」

「バカ言え。武器を取り上げておくんだよ」

「危険だ! それはやめとけ……………」

がらりら。

アリアが風呂場の扉を開けた。

流れる沈黙。

「――」

見つめ合う瞳と瞳。

「へ、ヘンタイ……」

アリアは右手で胸を、左手でおへその下あたりを隠す。
そして、目の前には自分の制服をあさる、遠山キンジ。

「ちが、こ、これはっ」

キンジは慌てて弁解しようと服の中から、武器をだす。
それがいけなかった。

銃と刀にはそれぞれ、ひらり、ひらり。

それぞれ、トランプの柄が入ったガキっぱい木綿の下着がひっか
かっていた。それはもう見事に。

「~~~~~死ね!!」

俺の鳩尾に前蹴りがクリーンヒットする。

苦痛に体を「く」の字に曲げる俺の顔面にきれいに、リアアット
が決まった。

神埼・H・アリア 1（後書き）

これからは、週末、週一で投稿できるように頑張ります。

がんばります……

神埼・H・アリア 2

チュン、チュン。

鳥のさえずりが鼓膜をくすぐる。

春眠暁をおぼえずというけれど、本当に起きるのがもったいないくらい、気持ちのいい朝だ。

「お腹が減った！ へったへったへったへったあああ！」

そう、このうるさいのさえいなければ。

昨日、結局部屋に泊まったアリアは今朝起き出すとともに、キンジに攻撃をかましている。

我が家の侵略者様は朝からアドレナリンがでまくっているようだ。

インベダー

このまま騒がれても迷惑なので、俺は昨日のうちに用意してたものをオープンにいれる。

バカ！ アホ！ ギャーギャーと尚も騒ぎ続けるアリアとキンジをしり目に、俺は出来上がったものをオープンからとりだした。いい塩梅にカットしてつと……

「ほら、アリア。これでもいいなら食え」

俺はアリアの前に皿によそったアップルパイを差し出してやる。

俺がそうすると、アリアは赤紫色の目を限界まで開き、お目目を輝かせて一心不乱にアップルパイに食いついている。

「おいしい！　おいしいわ！　勇士、あんた料理うまいのね。ちょっと意外だわ」

「はいはい、そいつはどうも」

意外って……まあ、いいけどね。

「悪い、助かったぜ。勇士」

キンジが片手を顔の前で立たせて、すまなそうに謝ってきた。
「気にすんな。俺もお前も被害者だしな」

さてさて、俺も学校に行く準備を……おっと、ぶるつときた。
ポケットから携帯をとりだすと、メールだった。送信元は……
………それを見たとき、俺は自分でも顔が険しくなるのを感じた。
くそっ、俺はできるだけ関わりたくないのに。

「キンジ、すまない。今日俺、学校さぼるわ。実家からコールされた」

「……………！　そうか。ひとりで大丈夫か？」

「心配するな。大丈夫だよ」

リビングに座っているアリアがこちらの様子を怪訝そうに窺っている。まあ、これ以上ここにいたら詮索されそうだな。もう、でるか。

俺は制服に着替えようとしていたのをやめ、クローゼットから礼服をとりだした。

俺の実家、沖田家は福島県会津市にある。郊外の、古く伝統ある巨大な屋敷が沖家本家、その名も「血風」である。

屋敷の周りは、森に囲まれ、夏は涼しく、冬は風を遮って、昔からの生活様式を保っている。

沖田家は古くから、たくさんのお秀な武偵を輩出している。俺はその正当な血を受け継ぐ、第一後継者なのである。

「ただいま、佐藤」

「おかえりなさいませ。勇士様」

木でできた門をまたぎ、庭を歩き、玄関前まで進んだところで、スーツを着た初老の男が出迎えてくれた。名は佐藤源氏^{さとうげんじ}。俺が生まれたときから俺の世話をしてくれた、俺にとっては、親代わりのような人である。

「奥の間で旦那様がおまちです」

「ああ、ありがとう」

俺は久しぶりに実家に帰った感慨にふける暇さえあたえられず、すぐに奥の間に通された。旦那様^{おきただんじ}というのはもちろん、俺の親父のことである。名を沖田玄氏^{おきたげんじ}といい、今は現役を退いているが、昔は凄腕の武偵として、名を世にとどろかせた。

俺は部屋のふすまに手をかける。やはり緊張する。こればかりは絶対に慣れないだろう。
スーッ

「父上、ただ今戻りました」

父はひじかけに頬杖をついてこちらを一瞥すると、居直った。
「お前を呼び戻した用件はな……」

何の前フリもなく、話を始める。久しぶりに帰った息子におかえりもなしか……

「お前のクラスに神埼・H・アリアという生徒がいるだろう」
「はい」

おんなじクラスどころか、奴隷宣言されて、部屋に居付かれてます。ともいえずに俺は素直に肯定する。

「察しのいいお前のことだ。気付いているかもしれないが……彼女……ホームズ家の末裔だ」

——ちっ

やっぱりか。そうじゃないかとは思ってたけどな。
神埼・H・アリアのHからしてな。

ホームズ家と沖田家は古くからの盟約に従い、互いに協力し合う。それが俺が昔、この屋敷に住んでいたときに、きかされていたことだった。

「アリア嬢は今、母上の冤罪、懲役864年の罪のすべての無罪を証明しようとしている。勇士、お前はアリア嬢に尽力しろ。これは命令だ」

相変わらずだな。この相手に有無を言わせない態度とオーラ。ほんと……気にいらねえ

「承知いたしました」

俺は父に頭を下げると部屋を後にした。

帰り際、俺はふと佐藤に気になって尋ねてみた。

「俺がいなくなって、破門にされた人は？」

「はい。24人でございます」

24人……。あの親父――

沖田家は完全実力主義の家系である。実力に合わせて、家の中にランク付けがあるし、いつまでもランクがあがらない人間は、あっという間に破門にされる。俺も子供の時、可愛がってくれていた、大人が、いつの間にかいなくなっていた――なんてことも何度もあった。

俺は家のそんなやり方が気に入らない。かといって、抗う力も持

ち合わせていない。だから、俺は毎回、実家に訪れるたび、不完全燃焼の炎を燦らせている。

実家をでて、東京へと戻る。

俺は電車の中で、状況を整理していた。おそらく、アリアのパートナーになるのは、キンジだろう。

俺は、そのサポートをしてやらねばならないだろうな。

「ユーくん」

俺が温室に入ると、理子がこちらに駆け寄ってきた。

「よ、今日は白ロリ風か」

「うんうん。さすがはユーくんだねえ」

俺はアリアについての情報を理子に頼んでいた。

「情報っていつでも特にないよ。強いていえば、私と似ているってことかな」

「そうか」

まあ、俺が知っていること以上の情報なんてないか。

「勇士」

急に理子が口調を変えてきた。

目つきも少し鋭さをもっている。

「まだ、傷はいえないの？」

「いや、どうだろうな。……理子。あの時は本当にすまなかったよ」

「理子は別にいいんだけどね」

俺が頭を下げると理子は少し、困ったような顔をする。

「実家にいつてきたの？」

「ああ、まあな」

「それで、アリアに協力するの？」

「……ああ」

「……そっか」

理子は、フランスの大怪盗「アルセーヌ・リュパン」のひ孫であり、アリアとは対立する関係にある。

つまり、俺は……理子とも敵対しちまう可能性もあるってことだ。

俺は、きっと理子のが好きなんだろうな。だが、お互いの立場、もつと言えば家柄が俺にのしかかってくる。理子は俺がアリアと協力するときいて、どう思っただろうか。

もの憂い顔で俺の目の前にいる少女は……なんというか、迷い、逡巡、憂い、などというような感情をたたえている。

可愛い……俺は素直にふと、そう思ってしまった。

「可愛い」

だから、ふと口から漏れてしまった。

「ふえ！？ な、何／＼／！？」

途端に顔を真っ赤にする理子。

「あ、い、いや。うつかり口に」

「~~~~~~~~／／／／／」

「り、理子？」

「ば、バカー~~~~~~~~」

俺は昨日に引き続き、リアットをくらった。おいおい、流行ってんのか……リアット。

俺が部屋のドアを開けると、玄関には靴が二足。2人とももう戻っているようだ。

「分かったよ。一度だけだ。一度だけ強襲科に戻ってやる」

どうやら、キンジが根負けして、強襲科に自由履修で戻ることにしたらしい。

「あ、勇士」

キンジが俺の方を向く。

「あんたも、私の奴隷なのよ。協力しなさい」

アリアは俺に向き直るや否やそう言った。

「ああ、協力するよ。その前に、一つ、話があるんだよ。悪い、キンジ。席外してくれるか」

「え？ お、おう」

キンジには悪いが、アリアが自分の意志で素性を明かすことが必要だ。

「で？ 何よ」

「神崎・ホームズ・アリア」

俺がそう言うと、アリアは片眉をピクツと動かした。

「気付いたの？」

「いや。アリア。俺は、沖田家の人間だ」

ホームズ家の人間にこういう言い方をすれば、伝わるだろう。

「な！？ じゃ、じゃあアンタは……………」

「ああ。俺は……………沖田総司の末裔だ」

first case (バスジャック)

勇士 side

沖田総司。

江戸、白河藩屋敷に生まれ、新撰組の一番組長として、活躍する。天然理心流の継承者で、天才剣士として、世に名をとどろかせ、現在も、書籍やドラマなどにとりあげられている。

俺は沖田総司の血を継ぐものとして、幼少のころから、剣を鍛え続けてきた。

そして、順調に才能の頭角を現し、家では親父の跡継ぎとして、期待されている。

ぶっちゃけそんなもん、継ぎたくないんだけどね。

そして沖田家は、遠山家、星伽とも縁があったらしく、俺がキンジや白雪と幼馴染なのはそのためである。

俺はアリアにそのことを打ち明けた翌日、アリアの母親——かなえさんというらしい。が冤罪として、捕まった事件の資料を読んでいた。

その中には例の武偵殺しの事件もあった。

この間のキンジのチャリジャックの件も考えると、これでヤツが終わると思わない。

窓の向こうにどしゃぶりの雨が降っている。
何か、嫌な予感がするな。

キンジ s i d e

ついてねえ。また58分のバスに乗り遅れた。このどしゃぶりの中をあるって行かねばならないのかと思うとうんざりするぜ。

どうやら、勇士は自分の家のことをアリアに話したようだ。
んで、勇士もアリアに協力するらしい。ま、剣の腕では、例えば俺がヒステリアモードになろうとも敵わない腕を持っている勇士のことだ。自分に危険が及んでも大丈夫だろう。

それにしても、うざったい雨だ。一時間目はふけてしまおうか。
そんなことを考えていると、
ブルブル……………

携帯が鳴る。ウィンドウをみると、神埼・H・アリアの文字。
「もしもし」

「キンジ。今どこ」

何だ？ もう授業は始まっているはずだが……

「んー。強襲科のそばだ」

「ちようどいいわ。そこでC装備に武装して女子寮の屋上に来なさい。すぐ」

「なんだよ。強襲科の授業は5時間目からだろ」

「授業じゃないわ、事件よ！ あたしがすぐといったらすぐ来なさい！」

バラバラバラ……

女子寮の屋上からへりが飛び立つ。

「何があった」

俺はへりに乗り込んですぐ、フリーファイニング状況説明を求める。

「バスジャックよ」

「バス——？」

「武偵高の通学バスよ。あんたのマンションの前にも7時58分に停留したハズのやつ」

——！？

あのバスが乗っ取られたってのか！？

あれには武藤を含め、たくさん武偵が乗ってるんだぞ。

「バスには爆弾が仕掛けられてる。おそらく、武偵殺しの仕業ね」

「勇士は？」

「別ルートで向かうそうよ」

「別ルートって……あいつ、バスの行き先分かってんのか？」

「さあ？ でも、勇士ならなんとかするでしょ」

確かに。

しかし、最初の事件がこんな事件になっちまったか……

とことん、ついてねえ。

勇士 s i d e

俺が一報をきいたのはちょうど、鑑識科棟から一般棟に移動しているときだった。

携帯に、e m e r g e n c yの文字。

バスジャック——爆弾を仕掛けられたらしい。

十中八九、武偵殺しの仕業だ。

携帯の電話帳から神埼を呼び出し、電話をかける。

「神埼」

「勇士！ 今、事件が……」

「ああ、聞いたよ。おそらくは武偵殺しだろう。俺は別ルートでバスに追いつく。アリアは、キンジに連絡して、チームを編成してくれ」

「分かったわ」

「おう」

おそらく、アリアたちはヘリで向かうだろう。なら俺は………

武偵高には事件発生の際に、現場に急行するため、様々な乗り物が完備されている。

その中にはこんなもんも、あるんだよね。

「電動スケートボード」

略して電ボ。

その名の通り、電動式のスケートボードだ。板に足を固定することができる。

最大100キロぐらいまでは出せるようだ。スイッチを押すと、

ウイイイイイン

モーター音が鳴り響く。

腰に下げた「菊一文字則宗」の感触を確かめつつ、俺は電ボを発売させた。

おそらく、バスは都心に向かうはずだ。なら、そこに先回りする！

俺がバスに追いついた時、ちょうど、アリアとキンジがバスのルーフに降り立つところだった。

ふとみると、遙か後方から、またあのUZIが迫って来ている。

キンジは車内に、アリアは車外で爆弾を探すようだ。
どうする。とりあえずは……

「キンジ！」

俺はキンジの携帯にかける。

「勇士！ 大丈夫か！」

「ああ。俺は大丈夫だ。キンジ、またあのUZIがきている。おそらく人体感知センサーがついている。車内からの攻撃はするな！」
「了解」

これで、キンジは車内から攻撃しようとする武偵がいても制してくれるだろう。

後は……

「アリア」

「勇士！ 車内には爆弾がないわ！」

「ああ。俺から見えてる。車体の下だ。後ろから潜り込めば、外せるかもしれない。やれるか？」

「当たり前！ あたしを誰だと思ってるのよ！」

だよねえ。よし、俺は……

俺は電ボを操り、UZIと、バスの射線上に移動させた。
ガン、ガンガガガガガン！

容赦なく降り注ぐ銃弾の雨を、俺は右手の刀一本ではじいていく。
頼む、アリア。早くしてくれ。この技は、集中力が鍵だ。そんな
にもたねえ。

「キンジ！」

アリアの声が響く。なんだ？

慌てて振り向くと、ルーフにキンジがでてきている！

——！？

あのバカ野郎！

ガン、ガン

キンジを罵倒する暇もなく、続けざまに二発の銃声。

確認するまでもない。片方はアリアに向けて、片方はキンジに向
けて発砲されたものだ。

これは……防げない！

片方は則宗ではじけても、もう片方は……

俺は瞬時にその判断を下すと、背中から小型ナイフを抜く。

左手に握ったそれを、銃弾に向ける——

キン、キン

二発ともはじくことができた。
が、

二発の銃弾を両手ではじいた俺は体を極端にねじるような格好に

なっていた。

当然のごとく、俺はバランスをくずす。

世界が暗転する――

ガン、ガララララガッシャーン

俺は意識を手放した。

目覚めた時、見知らぬ天井が目に入った。

どうやら、生きてるらしいな。

ふと見ると、自分の右足が包帯でぐるぐる巻きにされている。

こ、骨折かな……

我ながら無茶したもんだぜ。

枕元のデスクには赤いバラ。

カードが添えられ、「R・M」の文字。誰だろうか。

午前中に、キンジが来た。俺にひたすら平謝りしていたが、俺が別に気にするな。という、途端に、複雑そうな顔になった。

午後になって、アリアが見舞いにきた。

「わざわざ、見舞いにこなくても……ただの捻挫らしいぜ」

そう。俺は、あれだけ派手に転がっておきながら、怪我は右足の捻挫。しかも、明日には歩けるという。ついてるな、ホント。

まあ、一週間ぐらいは激しい運動はできないらしいけど。

「わざわざ、あたしが見舞いに来たのよ。感謝しなさい」

相変わらず、尊大なやつだ。

「あれから、犯人の使っていたホテルが分かったわ。

探偵科と鑑識科を中心に捜査したけど、何も分からなかったそうよ」

「まあ、そうだろうな」

あれだけ狡猾な犯人なんだ。痕跡を残すはずはない。

「私は、私は…… キンジに期待してた！ 現場に連れて行けば、またあの時のように実力を見せてくれると思った！」

アリアはそう言って、俯く。

その声には、落胆と焦燥が混じったような声だった。

この様子だと、キンジとケンカしたっばいな。

「私には、時間がない！ キンジだったらパートナーにピッタリだと思ったのに！」

他人からみれば、ずい分と身勝手な理由だろう。

しかし、アリアには本当に時間がない。

「聞いたよ。母親の無罪を証明したいんだろ。そのために、パートナーが必要」

「……アンタでもよかったんだけど」

「アリアだって気付いてるだろ？ 俺じゃないってことぐらい」

「……そうね。勇士は確かにあたしにはない力をもっているけれど、パートナー……では、ないかもね」

アリアはどうするだろうか。俺は、俺のすべきことはなんだろうか。

「アリア。キンジのことは、諦めるのか？」

「……分らないわ。分らないのよ……」

俺は悲しげなその少女を見ていることしかできなかった。

「送りなんていらぬのに」

「まあ、そう言うなよ」

俺は沖田家の人間として、アリアのイギリス行きに同行するようにとの命を受けて、飛行機に乗っていた。

全室個室。スイートクラスの「空飛ぶリゾート」と呼ばれる飛行機に乗り込んだ俺は、黙って窓の外を眺めていた。

「私が、家に行つて、断つてもよかつたのに」

「いやいや。俺にも最後まで見届けさせてくれ」

「？ 何のことよ？」

これは、一つの賭けでもあった。俺の推理が正しければ、キンジは必ず来る。

そして、動き出すはずだ。場面が。

ガチャ

「……さすがはリアル貴族様だな。これ、チケット、片道20万ぐらいするんだろ？」

「キ、キンジ！？」

部屋の扉を開けて、キンジが入ってくる。

やっぱり、か。

俺は自分の推理が当たっていることに、軽く観念と、絶望を味わ

う。

「空飛ぶリゾート」は今、ゆっくりと空へと飛び立つ――

f i r s t c a s e (バスジャック) (後書き)

こ、今週は頑張りました。

つ、疲れたあゝ

オルメス 1

勇士 side

強風の中、ANA600便は東京湾上空に出た。

俺は警戒をとかず、ソファに座って窓から外を見ていた。上空は暗雲が立ち込め、今にも降り出しそうな天気だ。

ガガン！ ガガン！

比較的近くにあった雷雲から、雷鳴が轟く。

ガガガン！

ひととき大きな雷が落ちると、アリアはキュッと首を縮めた。

「怖いのか」

「怖い訳ないじゃない。バツカじゃない。ていうか、話しかけないで。耳がイライラするわ」

ガガガン！

そう言った矢先、また落ちる。

「きゃっ」

どうやらアリアは本当に雷が怖いらしい。意外だけど、可愛いところあんじゃん。

「き、キンジ~~~~~」

アリアはベットに潜り込み、涙声でキンジの袖をつかんでいる。

「ほらよ、アリア」

俺はテレビをつけてやる。

アリアはそれをみながら、キンジに寄り添っている。

俺は、その時とても複雑な感情を抱いた。

キンジとアリアはお互いに武偵だから、出会った。

2人が武偵でなければこうして出会うこともなかった。

だが、もしキンジが普通の高校生で、アリアが普通の女子高生だとしたら、こうやって不安なときに手を握り合うような、普通の恋人同士のような関係になれたんじゃないだろうか。

そんな考えても仕方ない、矛盾した想いを抱いていると……

パン！ パアン！

——音。が、機内に響いた。

俺の警戒心がMAXまで引きあがる。

銃声——！

俺はすぐさま廊下に出ると、叫ぶ。

「武偵だ！ 全員自分の部屋に戻って、鍵をかける！ 絶対に部屋から出るな！」

わあわあど騒いでいた乗客たちが、やがて、部屋へと戻っていく。その廊下の先には——！

コックピットの扉が開け放たれている。

そこには小柄なアテンダントが機長と副操縦士を引きずり出している。

2人のパイロットは何をされたのか、全く動いていない。

どさ、どさ、と通路の床に2人を投げ捨てたアテンダントを見て、俺は咄嗟に構える。

「——動くな！」

俺の背後でキンジが銃を構える。

俺は姿勢を低くして、右手を則宗にかける。

キンジの声にアテンダントは特徴のない顔で、にいと笑った。

そして1つウインクをして操縦室に引き返しながら、

「Attention please. でやがります」

俺たちの足元に胸元から取り出したカンを投げってきた

「キンジッ！」

部屋から出てきたアリアが叫ぶと同時、

プシューーーーーー

カンから勢いよく白いガスが噴き出す。

これが危ないヤツだったら、すでに死の可能性がある。
だが、俺は……一歩右足を踏み出した。

「ふう」

「よう」

「!!」

俺は一階のバーでカウンターに腰掛けているアテンダントに話しかける。

そのアテンダントは一瞬、無表情になったあと……

「あゝあ。ばれちゃった。」

聞きなれた声で、顔にかぶっていたマスクを外した。

「理子」

「やっぱり、ユークンが一番警戒すべきだったね。ガスのはったり、
なんではれちゃったかなあ」

「お前は一般客もいる場で、毒ガスなんてつかうようなやつじゃない
だろう」

「……………／／／」

理子は少し嬉しそうな顔をする。俺はその顔を見ても、気分を晴
らすことができない。

「やっぱり、お前だったのか」

俺は俯きがちにそう呟いた。

「やっぱり、か。いつから気付いてたの。私が武偵殺しだったこと」
「割と早くからだよ。少なくともキンジのチャリジャックのころに
は、もう」

すると、理子は驚きに目を見開いた。そりゃそうか。俺たちはそ
のあと、温室で話したんだからな。俺はその時、止めしなければ、
忠告もしなかった。

「とりあえず、お礼いつとくぜ。病院のバラ。お前だろ」

「あ、あれは別に……………」

「心配してくれたんだろ？」

「……………うん／／／」

「まったく。こいつもこいつで、銃なんてもってなけりや普通の女子
高生なんだよなあ。」

「理子。俺はお前を止めない。けどな、全力でやりあおうぜ」

「……私は、勇士とは戦いたくないよ」

「だったら、やめるか？　こんなこと」

「それはできない！　私は、この壁を自分で乗り越えなきゃいけない」

理子は今にも泣きそうな声で、そう叫ぶ。

その顔は本当に悲しそうな、運命を憎み、それでいて、諦めていくような表情だった。

16、17の女の子がこんな顔をしなければならない。………そんなのってねえよな。

「！？」

キンジとアリアが入ってくる。

「——理子！」

「こんばんは
bon soir」

2人は理子を見てしばし固まる。

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよ

ね。武偵高にも、お前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。
でも……お前の一族は特別だよ、オルメス」

オルメス…… HOLMES のフランス語読み。

「あんた……一体……何者……！」

眉を寄せたアリアに、にやり、と理子が笑う。
その顔を、窓から入った稲光が照らした。

「理子・峰・リュパン4世——それが理子の本当の名前」

フランスの大怪盗の子孫。名前から察すると、少なくとも日本人の血が入ってるってことか。

「でも……家の人間はみんな理子を『理子』とは呼んでくれなかった。お母さまがつけてくれた、このかわいい名前を。呼び方が、おかしいんだよ」

「おかしい……？」

アリアが呟く。

「4世。4世。4世。4世さまあー。どいつもこいつも、使用人どもまで……理子をそう呼んでたんだよ。ひつどいよねえ」

「そ、それがどうしたってのよ……4世の何が悪いってのよ」

なぜかハッキリとそう言ったアリアに、理子はいきなり目玉をひんむいた。

「——悪いに決まってるんだろ！！ あたしは数字か！？ あたし

はただのDNAかよ!? あたしは理子だ! 数字じゃない! どういつもこいつもよオ!

突然キレた理子に、俺は同情の視線を向ける。

理子は己の運命と、非力さを呪い、しかし、それを打ち砕いてやるうと立ち上がったんだろ。そうとう強いぞ。理子は。

「曾おじい様を越えなければ、あたしは一生あたしじゃない、『リユパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た——この力で、あたしはもぎ取るんだ——あたしをッ!」

悲痛な面持ちで叫ぶ理子を、アリアは深刻な顔で聞いていた。

「『武偵殺し』は……本当にお前の仕業だったのかよ!？」

「…………『武偵殺し』? ああ。あんなの」

じろ、と理子がアリアを見る。

「プロローグを兼ねたお遊びよ。本命はオルメス4世——アリア。お前だ」

その眼はもはや、普段の理子の眼ではない。

獲物を狙う、獣の眼だ。

「勇士。あんたは知ってたの? このこと」

アリアが俺に聞いてくる。

「ああ。俺は理子の正体も知っていた。もちろん、理子が背負っているものも。『武偵殺し』についても、キンジのチャリジャックに

しろ、バスジャックにしろ、俺たちが解決できるギリギリのレベルの犯行だった。チャリジャックは、速度感知センサーらしきものは発見されなかったし、バスジャックについては、UZEIが一台しか現れなかった。つまり、本気で殺す気はなかったってことだ。すべてはアリア——お前をおびきだす、餌だったってことだよ」

俺の推理を聞いていた理子はスッーと目を細めると、

「今回の最大のイレギュラー因子は勇士の鑑識能力と推理力を甘くみていたことだ。あとは、キンジとアリアがくつつききらなかったこともそうだけど」

理子は楽しそうに、そう言う。

「勇士！ 何で言わなかったのよ！ アンタ、裏切ったの！」

アリアは今にも歯ぎしりしそうな表情で俺に問う。

「言っただろう。俺は理子の背負っているものを知っているって。その上で今、俺はアリア側にいるんだ。理子は己の全てをかけて、お前に挑もうとしてるんだぞ。お前は——神埼・H・アリアはそれを正面から受け止めてやらないのか？」

俺がそう言うと、アリアは悔しそうな表情のまま、理子に向き直る。

「くそ！」

見れば、キンジが理子にベレッタを奪われている。
兄貴のことで挑発されたのか。

駄目だな。ここは理子が制している、いわば、理子の城。そう簡単には落とせない。

「ノン、ノン。ダメだよキンジ。今のお前じゃ、戦闘の役には立たない。それにそもそもオルメスの相棒は、戦う相棒じゃないの。パンピーの視点からヒントを与えて、オルメスの能力を引き出す。そういう活躍をしなきゃ」

うつとりと高説をぶつた理子を見て——その隙に、アリアが動いた。

ばんっ！ と床を蹴ったかと思うと、二丁拳銃を構えて襲い掛かる。

やがて、至近距離からの銃撃戦がはじまった。

相手の射線から自分の体はずす。間合いを詰める。

「アリア。二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ？」

理子はカクテルグラスを投げ捨てると、その手で——
もう一丁、ワルサーP99をスカートから取り出した。
「！」

これで装弾数的にはアリアが圧倒的に不利。

「——はっ」

弾切れを起こした次の瞬間、アリアはその両脇で理子の両腕を抱えた。

格闘戦ではアリアに分がありそうだ。

「キンジ！」

キンジがバタフライ・ナイフを手のひらで回転させて開く。

「そこまでだ理子！」

キンジがアリアの背後に突き出た拳銃に注意しつつ、慎重に近づこうとした時——

「^{カドラ}双剣双銃——奇遇よね、アリア。理子とアリアは色んなところが似てる。家系、キュートな姿、それと……2つ名」

「？」

「あたしも同じ名前を持つてるのよ。『双剣双銃の理子』。でもねアリア」

見ると、——シュ、シュルル。

理子のツーサイドアップの髪の毛が、魂をもった生き物のように、動き出した。その先には、背後に隠してあったと思われるナイフが

巻かれている。

これは、——これは、ヤバイ。

「逃げる！ アリア！」

俺が叫ぶと同時に、理子のナイフがアリアに襲い掛かる。
ザシュッ！

一撃目は外れたものの、反対のテールに巻かれていたナイフが、
側頭部を斬った。

紅い、紅い鮮血が飛び散る。

「あは……あはは……曾お爺さま。108年の歳月は、こうも子孫
に差を作っちゃうもんなんだね。勝負にならない。コイツ、パート
ナーどころか、自分の力すら使えてない！ 勝てる！ 勝てるよ！
理子は今日、理子になれる！ あは、あはは、あははははは！」

まずい。我を失いかけてるぞ、理子のやつ。

「キンジ！ アリアを抱えて逃げろ！ ここはひとまず引き受ける」

キンジにそう言つと、俺は理子に向き直る

「勇士。私はアンタとは戦いたくない」

「ああ。俺もだよ」

「じゃあ……………」

「俺の仕事は時間稼ぎだ。キンジが覚醒するまでの、な」
俺は腰の則宗に右手をかけて、軽く笑う

「できると思ってるの？ この状況下で」

「できるさ。遠山キンジならな」

俺は自信たっぷりといった顔で理子に笑いかける

「本気で来いよ」

「もちろん。初めてだね。勇士と本気でやるのは」

2人の間に緊張が走る。

俺と理子は同時に地面を蹴った。

オルメス 2

ガキ！ バチィ！

銃弾を弾く度、剣と剣がぶつかり合う度に火花が飛び散る。

理子は双剣双銃。つまり手数が4。対する俺は菊一文字則宗一つだ。

俺は猛烈な理子の攻撃をひたすら弾いていく。

「あはははっ。楽しー！！ いいよいいよ！ 勇士！……！」

戦闘狂の眼。この戦いを心から楽しんでやがる。まったく……

俺はさっきから理子に押されっぱなしだ。すべての攻撃は紙一重でかわしてはいるが……

戦闘開始から10分がたった。さっきまで楽しそうだった理子の顔が一変、焦りを帯びた険しい顔になった。

「なぜ！ どうして一撃たりともあたらない！」

そう。ここまで俺は一太刀たりともくらっていない。全神経をかわすことだけに集中させた結果だ。

「ここまで五分五分だな。理子」

ギリ、と悔しそうな顔をする。俺がかわずだけでまったく攻撃しなかったのも、イライラの元凶だろう。

「私は、……こんなところで、立ち止まれない！」

誰に言っているのか……おそらく自分へだろう。理子は呟くと、俺に一気に間合いを詰めてきた。

潮時だな。

俺はポケットから煙幕弾をとりだすと、足元に投げ付けた。

ボン！

あたりが一瞬で真っ白になる。

「じゃあなー」

俺はスタコラとその場を後にした。

その場を後にした俺は、まず一部屋、一部屋回って、状況説明をした。

ハイジャックを企んだ犯人が機内に潜り込んでいたが、我々武偵が無事逮捕しました、と。

次にコックピットにて、機械をいろいろいじってみたが、うんともすんともいわない。操縦機能も乗っ取られたらしいな。これは。

え？ なぜキンジたちを助けなかった？ それは、これはあいつらの事件だからだよ。あいつらで片をつけなければならぬ。

俺は時間稼ぎ、という俺の仕事をした。後は、あいつらの番だ。

まあ、キンジなら大丈夫だろう。

俺は再び、一階のバーに戻ってきた。カウンターにあったシャト
ー マルゴーを飲んでいると、

ガチャ

理子が入ってくる。

「よう。その様子だと、追いつめられたみてえだな」
「うるさい。負けたわけじゃないし」

俺が苦笑交じりにからかつてやると、理子はそっぽを向いてそう言った。

ホントに、負けず嫌いなやつだな。

「だから言ったる。キンジはやるときはやる男だって」
「目の前で、生キスみせられちゃったよ……」

ははっ。よりによってその現場に遭遇したのか。

「理子の国のモンを頂いてるぜ。飲むか？」
「飲まないわよ」

俺がシャドー マルゴーが入ったグラスを持ち上げると、理子は首を振って壁際に向かう。
爆弾で壁に穴開けんのか。

「なあ、理子。お前が倒したいのは、本当にアリアなのか？」

俺が聞くと、理子は歯を食いしばったまま、そっぱを向く。

「理子。俺は、決めたよ。強襲科に戻る。あの出来事を、ようやくふっきれそうだ」

俺がそう言うと、理子は驚きとも、安堵ともつかない表情をみせた。

「そう、よかった」

理子是这样いとき、とても優しい顔をする。

理子は色んな顔を持っているが、

普通のぶりっこしている理子も、

アリアとたたつかているときの理子も、

こんなふうに優しい顔をする理子も、

全部、こいつの一部なんだよな。

「理子。俺はな、お前の味方だ。お前がこれまでしてきたことを知ってもなお、俺はお前の味方だよ。だから………また、な」

俺のそんな台詞を聞いた理子は――

「……………／／／」

嬉しそうな、それでいて、悲しそうな表情をした。目尻には涙も溜まっている。

ズガン！

爆弾がさく裂し、壁に穴が開く。理子の体が外に飛び出していく瞬間――

「勇士！ 愛してる！！」

――愛してる、か。

俺が、理子の言葉を頭の中で反芻していると――

ん？ 空に二つの光が見えた。

ま、まさか……………

ミ、ミサイル！？

ドオオオオオオン！

瞬間、二機のミサイルがANA600便に直撃する。
おいおい、理子。

そりゃないぜ。愛の証か？ 激しすぎんだろ。

俺がコックピットに入ると、すでにアリアが操縦かんを握っていた。

「アリア！ 大丈夫か！」

「ええ、そっちも大丈夫そうね」

キンジは隣で管制塔と連絡を試みている。

「アリア、着陸は？」

「できないわ。飛ばすだけで精一杯」

ここはおそらく、キンジにまかせておけば、大丈夫だろう

「キンジ！ 後は頼んだぞ！ 俺は他の乗客に説明してくる！」
「おう！ 任せろ」

キンジの眼は鋭い光を放っている。たしかに、いい眼だ。俺でも少しひるむくらいだな。

「当機は、羽田に戻ります。運転しているのは、武偵ですが、資格のあるものなので、ご安心ください。揺れに備えて、シートベルトの着用をお願いします」

俺は、一部屋一部屋こう言って回った。嘘八百もいいところだが、しかたあるまい。

ふと、違和感を感じる。

ホントに羽田に向かってんのか？

何か微妙に方向が違うような……

窓の外を見ると——F-15Jイーグル——
航空自衛隊の戦闘機だ。

くそっ 羽田には来させないってことか……

じゃあ、ANA600便は、どこへ向かってるんだ……………？

そこまで考えた時、俺はキンジの考えが手に取るように分かった。
あの野郎、無茶しやる。

「おい、キンジ」

俺は機内無線でコックピットにつなげる

「勇士か。客の静粛、お疲れさまだったな」

「そんなこと言ってる場合かよ」

キンジはまだヒステリアモードが続いているらしい。
声に張りがある。

「キンジ。空き地島への着陸たあ、お前もぶつとんだことを考えた
な」

「……………それなんだがな。勇士からも見えてないだろ。空き地島なんて。……すまん、勇士。巻き込みまつて」

キンジは少し声のトーンを下げてそう言った。

「おいおい、まるで今生の別れの直前みてえだぜ。俺はこんなところでは死にたくない。だろ？ アリア？」

「当然！ アタシはまだママを助けてない！ あたしたちはまだ死ねないのよ！ こんなところで、死ぬわけがないわ！」

俺が無線を通してアリアに言うと、元気な声が返ってくる。

「な？ 俺とアリアはこんなところで死ぬなんてこれっぽちも思っ
てないぜ」

「……………だ、だが、方法がない」

「見てみるよ」

俺が窓の外を見てそう言うと、

キラ……キラ、キラ、キラ……と。

ベイブリッジの手前にある、『空き地島』の上に光が見え始めた

……………！

『キンジ！ 見えてるかバカヤロウ！ お前が死ぬと、白ゆ……いや、泣く人がいるからよオ！ オレ、車軸科で一番でかいモーターボートをパクっちまったんだぞ！ 装備科の懐中電灯も、みんなが無許可で持ち出してきたんだ！ 全員分の反省文、後でお前が書け！』

武藤の声が聞こえてくる。

『——キンジ!』 『機体が見えてるぞ!』 『あと少しだ!』 『もう少し頑張りやがれッ!』

こいつら。

俺たちがバスジャックで助けたヤツらじゃないか——!

「はっはー。最高だ! 友達がいのある奴らじゃねえか! キンジ、ここで死んだら、反省文が書けなくなるぞ! 絶対死ねねえな!」
「バカ言っな! お前も手伝っんだよ!」

キンジの声に再び、明るさが戻る。

「キンジ。着陸するとき、一番後ろの車輪だけは、ださなくていい」
「あいよ」

俺の言葉に理由も聞かず、回線がきれる。

さあ、クライマックスだ!!!!

[illegible]

ANA600便は雨の人工浮島に強行着陸を敢行する。

体が揺さぶられるほどの振動の中、機体が逆噴射をかける。

俺は一番後ろの車輪の近く、つまり地面との距離が最も近くなる場所のハッチを開けた。

ゴオオオオオオオオオオ！！

凄い風が吹き込んでくる。

すぐ目の前にコンクリートの地面が見える。

俺は気合一閃、菊一文字則宗を、

地面に突き立てた。

ギューイイイイイイイイイイ！

途端に襲ってくる手首の痛み。

しかし、則宗はコンクリートの地面を火花をちらしたまま、切り裂いている。

『菊一文字則宗』は名刀中の名刀。コンクリートだって斬れる。そして、少しでも、地面との摩擦でスピードを殺せる！

————— ! ! ! ! !

俺は慌てて、則宗を地面から抜く。

ガスンツ！！

機体はそこを軸にぐるりと回転する。

失った。

オルメス 2（後書き）

今週も、なんとか2本、あげました。

疲れた〜。

酷評、注意、大、大、大歓迎です。感想をいただけると、作者のモチベーションがグーーーーーーーとあがります。
他、お気に入りに登録してくれた方、評価を下さった方、ありがとうございます。

これからも、燃えよ魂〜緋弾のアリア〜

を、よろしく願います。

次のステージへ!!!

俺は意識を失ったのち、病院にしばらく入院した。

今は、アップルパイを焼いている。

ずっとたべたかったんだよな、アップルパイ。

ベランダではキンジとアリアが星空をみながら話している。

おそらく、キンジはこのまま、アリアを突き放すだろう。

俺にできることが、あるかは分からないが、今は、アップルパイだ。

焼けたアップルパイをもってリビングに行くと、アリアはすでに、帰る用意をしていた。

「アリア。もういくのか」

「ええ、ロンドン武偵局が迎えにきてるのよ。アンタにも世話になったわ。じゃ」

アリアはトランクを持って、玄関に向かった。キンジがその後ろをついていく。

ガチャ

ドアを閉める音が聞こえる。

一件落着…….と思ってるのか？ キンジ。

しばらくすると、キンジは俯きがちにトボトボと戻ってきた。
そして、机の引き出しに入っている教務科に申請する、転校手続き書を手に固まっている。

「まったく……。本当に不器用なヤツだ。俺はアップルパイをカットしながら、キンジに言う。」

「なあ、キンジ。お前は、今、何を聞いたんだ？　アリアの泣声をきいたんじゃないのか？」
「！」

驚きに目を見開いたところを見ると、凶星か。

「俺はな、キンジ。お前の決めたことに反対はするつもりはないが、今のお前は、自分に嘘ついてないか？」

「そ、それは……。ち、違う、はずだ」

キンジ、お前も自分の運命を憎んで、変えようとしてるんだよね。
でも、でもな。

「遠山キンジ！ お前は、目の前で泣いて困っている女の子がいるのに助けないのか！？ 手を差しのべてやらないのか！」
「！！！」

俺はキンジの前で大声で叫ぶ。それを聞いたキンジは――

ビリッ

手に持った書類を引き裂いた。そして、

ガチャッ

走って、出て行ってしまった。

ったく。最初からお前の気持ちなんて決まってたんだよ。素直になりやがれ。ホント、世話のかかるヤツばっかだよ。俺の周りには。

アップルパイをパクついていると、

ガチャ

扉が開いた。もう帰ってきたのか？　いくらなんでも早すぎる――

「ハロー　ユークン」

そこには、金色のツーサイドアップをした、礼服をきた理子が立っていた。

「よお。一日ぶりだな」

「今、キーくんがはしっていくのが見えただと……うまくいったみたいだね」

理子は穏やかな眼をしていた。あ那时的戦闘狂った眼と同一人物とは思えない。

「私、今から武偵局に行く。しばらく、会えなくなるね」
「……………そうか」

俺はどんな言葉をかけるべきなのだろうか。

「じゃ、私はこれで……………」

「ま、待て。アップルパイ、食べていかないか？」

咄嗟に俺の口からでたのはそんな言葉だった。

理子を部屋にあげ、紅茶をいれる。

食べ始めると、理子は途端に頬を綻ばせた。

「相変わらず、おいしいね。ユークンのアップルパイ」
「昔は、よくご馳走してたんだけどな」

俺が強襲科にいたときは、な。

「あの時もいったけど、俺、強襲科に戻るよ」

「うんうん。ユークンは強襲科にいたときが一番輝いてるよ」

理子がにこにこしながら、そんなことを言う。

可愛い顔して、そんなこと言っつつの。

「しばらくは、アリアの面倒を見ることになるんだろうな。あいつも普通にすればあんなに浮くこともなく、可愛いヤツなのにな」

「………… ユークン？ アリアのこと、好きになってないよね？」

理子がずい、と顔を近づけて眼を半眼にして言う。

「そ、そんなわけないだろ」

「ふん。どうかな」

俺は、理子の顔を急に至近距離でみたことでどぎまぎしてしまう。

ラッキー♪

理子はそっぽを向いて頬を膨らませている。

怒った顔も、可愛いぞ。なんていったら、さらに不機嫌になるだろうか？

「じゃあ、私はそろそろ行くよ」

「おう。また、な」

俺は玄関まで理子を見送りに出ると、理子はドアを開け――

「勇士。私飛行機で最後に言ったこと、本気だからね」

ほのかに微笑んで出て行った。

飛行機で最後に言ったこと、か。

愛してる、だよなあ。

本気、本気。ふふ、ははっ 俺は心の中でかなり舞いあがっていた。
た。

さてさて、キンジとアリアを迎える準備をしますか。

キンジとアリアが同棲を始めて一日目。俺はのんびりとリビングで本を読んでいた。

ん？ 騒がしいな。何事だ？

「神埼・H・アリアーーーー！！！！！」

こゝこの声は……

「アリア！ キンジ！」

俺が廊下に飛び出ると、

「この泥棒ネコ！ き、き、キンちゃんをたぶらかして汚した罪、

死んで償え!!」

白雪は青白く光る日本刀を振り上げ、今にも襲い掛かりそうだ

「勇士!」

アリアとキンジが同時に俺を呼ぶ。

「助けてくれ(なさい)!!」

そして、ふたり同時に俺に助けを求めてくる。

マジかつ。本気モードの白雪は俺でも五分五分なんだぞっ!

くそっ 不幸だあああああ――――――

次のステージへ!!!（後書き）

はい、この小説を書かせていただいている夢見と申します。

まず、謝辞を。最後の最後でネタを使いました。ごめんなさい。

さてさて、まず私についてですが、身分としては学生でございます。サークルにも入っておりまして、中々執筆時間がとれないというところなのですが……

それでも、週一ペースでは更新できるよう、頑張ります。

第一部を無事完結できたということで、私自身、ホッとしているのですが……

と、いうのも私はこの小説を書き始める前に、この小説だけは、完結させる！ と意気込んで始めたものですから……

しかし、これからが勝負どころ。ますますの精進に励みます。

さて、本作品では、沖田総司の子孫である、沖田勇士を主人公として話が進んでまいります。

ヒロインは理子の予定ですが……

少なくとも後1人は、オリキャラをだそうと、考えています。次のジャンヌ・ダルク編では、あまり理子の出番はありませんが、それでも、皆様に楽しんで頂けるような文章を目指して頑張りますので、応援どうかよろしくお願い申し上げます。

邂逅 1 (前書き)

邂逅 1

理子 s i d e

はあゝ すつきりした。

私は、勇士の部屋を出た後、車がバンバン走っている主要道を歩いていた。頬にあたる風が心地いい。

台風が過ぎ去り、おそらく今は晴れてるんだろうが、地上が明るくて、星はみえない。

いえた、言えた。

私はひとり、心の中でほくそ笑む。心はいいしれない達成感に満ちている。

勇士は、私が武偵局に行く。つまり自首するといっても、「またな」といつてくれた。

近いうち、きっとまた会える。

……それにしても、さっきの女子寮から飛び降りる人影。間違いなく、キンジとアリアだろう。

フフッ

屋上のすぐ上にロンドン武偵局のヘリがホバリングしてたから、おそらくキンジがアリアを拉致ったんだろうが……

囚われのお姫様を助ける王子様……

キンジ、ヒステリアモードでなくっても、十分やってることはキザっただけ。

でも、これでキンジとアリアのパートナーは固いものとなつたはずだ。

でも、これから武偵局に行けば、司法取引するにしても、しばらくでてこれない。それはつまり、しばらく勇士にも会えないってこととで……

う、面倒臭っ

さっきまでの気分が一転、憂鬱になる。

ああ、後悔はしてないとはいえ……

心の中でため息を吐く。

「ユークン」

気分を明るくするために声に出して言ってみる。それだけで気分が不思議と軽くなった気がした。

あゝあ、ホントに恋しちゃってるんだよね

恥ずかしいことに、自分でもそう思う。

そんな時、ふと脳裏に、一年前の出来事が蘇ってきた。

一年前、3月10日 東京武偵高入学試験――

「はあ」

三分咲きぐらいの桜並木を歩いて行くと、私はだんだん自分が憂鬱な気分になっていくのを感じた。
面倒だなあ。

そう思いながら空を仰ぐ。

ソメイヨシノが目に入った。

そういえば、と思う。フランスにも桜があったっけ。でも、ソメイヨシノは見かけたことがない。

見るのは主に、二重桜だった。

何でだろ？ ソメイヨシノは儂げな白。二重桜は濃いピンクである。

フランス人は濃いピンクの桜の方がお気に召したのかな。私はソメイヨシノのほうが、綺麗だと思うけど……

まあ、それだけでも日本に来たかいたったというものか。

入学試験30分前。他の武偵高の生徒はぞくぞくと校舎に向かっていく。

毎年、武偵高の入学者は変わり者が多いとされているが、どの生徒も力を手に入れ、犯罪者を捕まえるために、ここに入学しているのだ。

反して私は力を手に入れ、それを復讐に利用しようとしている。

「フフッ」

犯罪者を捕まえるためと、犯罪者になるため。

あまりにも相反する動機に、思わず苦笑が漏れた。嘲笑かもしれない。

今、希望を抱いて、校門をくぐる生徒と自分を比べると、何だかやるせない。

ま、そんなこと考えても仕方ないよね。

私は顔をあげると、『探偵科』と書かれた建物に向かって歩き出した。

探偵科でペーパーテストを受けた後、私たちは別棟に連行された。ペーパーテスト自体はそこまで難しいものではなかった。

待合室で待たされ、1人づつ呼ばれていく。

待合室には50人ほどの生徒がいる。

定員は30人。時代とともに、武偵の必要度はあがってきているとはいえ、そこまで莫大な入学希望者がいるというわけではない。命の危険が付きまとうからそれはそうなのだが……

試験概要によると、ペーパー30%、実技70パーセントの割合で合否を決めるようだった。

私の番が来た。試験官に呼ばれて連れて行かれたのは、縦長の奇妙な建物だった。高さは10メートルほどだろうか。煙突をぶつとくしたような外容。外壁はコンクリートで、植物のつたがへばりついており、異様な恐怖感を醸し出していた。

外壁に似合わず、木製の扉がひとつついている。

うながされるまま、中に入る。

ま、探偵科だし、そんなバトルっぽいもんじゃないでしょ。

中に入ると、床の中央に階段が上へと伸びているだけで、ほかに目立ったものは見当たらなかった。

私の後ろで、付き添いの試験官が扉を閉めようとしている。

——その時、ちょうど反対側の扉が開いた。
そして誰かが入ってくる——

ボタン

バン

扉が閉まると同時に、突如として電気が消えた。私はとっさに身構える。

私は、暗闇があまり好きじゃない。昔の記憶が蘇る。

プツ

『今から探偵科、強襲科の合同試験を開始します。今、このフィールドには2人の試験者がいます。2人で一番上まで上って来てください。制限時間は30分です』

機械的な音声が響く。強襲科との合同試験！？　　ってことはバトル有？

っていつか……この暗闇じゃ、お互いの姿も見えないんですけど

……

「おい」

「ふああっ！」

ポンと急に肩に手を置かれたもんだから、思わず変な声で跳びあがるほど驚いてしまった。

振り返ると、暗闇に少し眼が慣れてきたのか、声のしたほうかうすぼんやりしている。

良く見えない。

もっと目をこらすと………見えた。2センチ先に、相手の顔が。

「きゃ」

「のおおっ！」

ドシン

びっくりしたが、もっとびっくりしたのは相手の方だったようで、音から察するに慌てて飛びすさると、尻もちをついたようだ。

その男は……男にしては長めの髪にぱっちりした二重の目、口や鼻が小さく、中性的な顔をしていた。

顔立ちは整っているといえるだろう。

見ようによつては、かなり年上に見えるし、中学生のようにも見える。

腰には……剣がつるしてあるようだ。

私は腰をかがめると、

「ああ、ごめん。びっくりさせちゃった？」

手を差し出す。

「おお、悪いな」

その手を握ってきた。

ひょい。

——びっくりするほど軽い。

本当にこんな華奢な男が強襲科なんだろうか。

その男はパンパンと服のほこりをはらい、

「とりあえず、階段上ろうか。こんなところにおいても仕方ないし」
「そうね」

そう言って歩き出そうとする。

歩き出すと、その男はこちらを見やり、

「君、探偵科だろ？ 敵が現れたら、俺が相手するからさ」

私はその言葉に少々ムツとする。本人は親切心で言ったのかもしれないが、これでは弱いお前には任せられないから、俺がやる。と言われているようなもんだ。

私は自分で言うのもなんだが、おそらくこの男よりは強い自信がある。

「あんた、何言ってるの？」

「え？」

「私だって戦——」

「危ない！」

私が背後に気配を感じたのと、男が叫んだのが同時だった。

いつのまにか、気配を殺して、私の後ろに試験官が近付いてきていたようだ。

私は咄嗟にその場にしゃがみこみ、反転して腰のホルスターから銃を抜く。

ジャキ

ドン

ドサ

その男の方が早かった。私が銃を突き出した時にはもう、背後から近づいてきた試験官の首筋に峰打ちがきまっていた。

試験官はひざから崩れ落ち、床で失神する。

シュキン

男が鞘に剣……いや、刀をしまう。そして勝ち誇った顔で、

「な？ 荒事は俺に任せとけて。危ないから、おとなしくしてな」

かっち————ん。

「なめないで！ 私だって戦える！」

私がそう言うと、男は目をすうっと細めて、

「ほう」

と感心したように言う。顔が微妙に笑っている。うがーーーーー
ーーーーー！ ム力つくー！

「私は、あんたみたいな男よりも強い！ 見てなさい！ 次の敵は私が倒して見せるからー！」

「ほー。ほほう」

「なーーーーー！ いちいちム力つくー！」

「ふふっ、じゃあよろしく頼む。沖田勇士だ」

「峰理子よ。名字で呼ばれるのは好きじゃないの。理子でいい」

すると、勇士はわずかに片眉をピクツとあげる。

「じゃ、俺も勇士でいいぜ。よろしく、理子」

私は、満面の笑みで差し出された右手を、思いつきり握ってやった。

邂逅 1（後書き）

理子と勇士の出会いを描く、オリストーリーを創りました。

しかも、まだ続きます。

楽しんで頂けたら幸いです。

邂逅 2

「つてゝな。ひどいよ」

「自業自得でしょ」

右手をひらひらさせながら、私の後ろをついてくる。

「先どうぞ」

階段にさしかかったところで、勇士が先を譲るように手で仰いだ。この階段、幅が一人分くらいしかなく、縦になって歩くしかない。

一段上るたびに、カン、カンと乾いた金属質の音がする。

「ねえ、さっき暗くなってからすぐに私に声をかけたけど、見えたの？」

「暗くなった瞬間に目を閉じて、暗闇に目を慣らしたんだ」

本人はこともなげに言うが、とんでもなく化け物じみた適応能力である。

感心半分、呆れ半分といった感じだが、勇士はおそらくかなり強いんじゃないだろうか。

さっきの反応速度を見ても、常人の比じゃないことは一目瞭然だ。カン、カンと階段を上っていくと、一段、色の違う階段にさしかかった。

「どうした？」

私が足をとめると、当然のごとく後ろから声がかかる。

「ここだけ段の色が違うのよ」

私が答えると、肩越しに、勇士が顔をのぞかせた。意図せず、顔が近付いて、その横顔が至近距離にせまる。

どきっ――

え？ 自分でもわからないまま、心臓はどきっとしていた。

え？ 私、今どきつとした？ この男に？ こんな無神経男に！？

かああああっ

やばい！ 顔が熱くなってきた。

「ん？ どうした？ 顔赤くないか？」

「！ いや。そんなことはないよ！！」

私は慌てて前を向きなおす。お、おかしい。未だにドキドキがとまらない。

「どうする？ 罨かもだし、とばしていくか？」

勇士の言葉ではっと我にかえる。

い、今のはおそらく一種の反応。突然のことだから、びっくりしただけ――

――ふうっ 私はひとつ、息を吐いて心を落ち着かせる。

私は、自分にそういいきかせ、その段に顔を近づけてつぶさに観察する。

……なるほど、そういうことか。

「この段はふんでも大丈夫。次の段はとばして。あ、手すりにはつかまらないでね」

この罨は二重の罨だ。色が違う段の次の段にピアノ線をはって置いて、上の仕掛けにつないでおく。これで、色つきの段をとばそうとすると、罨にはまるというわけだ。

しかし、その仕掛けに気付いても、念のためと思って色つきの段とその次の段を手すりに力をかけて、とばそうとすると、手すりにもピアノ線がひいてあるので、罨にかかる。

つまり、ここでは色つきの段を勇氣を持って踏むことが大事となるのだ。

「へえ」

私の説明を聞いた勇士は感心顔でそういう。
ふん。少しは見直したか。

そこからさらに4、5段進むと、勇士が

「ね、その仕掛け見てみない？」

と言いだした。

見上げると、ピアノ線は風船のようなものにつながっている。

まあ、確かに気になるし…………

私が承諾すると、勇士は懷から筒のようなものを取り出した。口にくわえたところをみると…………吹き矢！？

フツ………… ヒュン パァン！

見事、命中。そして…………

ザアアアア

大量の粉末が落ちてきた。そして、かき覚えのある刺激臭。うっ、何の臭いだったかな、これ。

「これ、何の臭いだっけ？」

「…………唐がらしの臭いだよ」

「……………」

2人して絶句する。

唐がらしの粉なんかを頭からかぶった日にやあ…………ゾツとしな
い。

…………存外に、このテストの主催者はかなり質の悪い人間なのか
もしれない。

「ねえ、勇士。あんた、銃は使えないの？」

階段を上りつつ、私は後ろを軽く振り返りつつ聞いてみた。さっき勇士は銃を使わず、吹き矢などという、古い道具を使っていた。それとも、銃は使わない主義なんだろうか？

「いや、使えないこともないんだけど……」
「使えないこともないんだけど……？」

私は後ろを完全に振り返って、勇士の両目を正面から覗きこんでやる。

「うつ……」

勇士は私にみつめられると、途端に顔をそらして、言葉に詰まる。心なしか顔が少し赤い。ほほお、これはこれはもしかして……

「へ、下手なんだよ……」
「え、良く聞こえなかったなあ、なんて？」
「うぐっ」

勇士は悔しそうに、歯ぎしりしながら視線をそらす。
これはこれは、意外な弱点があつたね♪

「下手なんだよ！ 銃は！」

やがて、やけっぱちになったように、勇士が叫んだ。

まあ、意外と言えば意外だ。武偵高の生徒、主に強襲科の生徒は銃を使う者が多い。この世に自動拳銃が登場してからというもの、銃という武器は近接戦には最強の武器になりつつある。

刀を主に使う者もないことはないのだが、それでもごく少数だ。

「へえ」 そうなんだあ。ふふ、なんかいいこと聞いちゃったなあ
「くっ……」

私は勇士をからかいつつ、再び前を向いて、階段に足を踏み出した。

やがて、少し大きめの踊り場のような場所が目の前に広がった。

その通り踊り場なのだろうが、雰囲気が変わったのはそこに足を踏み入れた瞬間だった。

「勇士」

「おう、理子も気付いたか」

その場にピーンとはりつめる緊張感。漂う攻撃的な気配。

私は、自分の索敵能力、特に攻撃的な気配の察知に関してはかなり敏感であると自覚している。

また、どうやら勇士もそういった感覚は敏感なようだ。

「1、2、3、4、……………5人か」

勇士が人数を数え上げる。姿は見えていないが、確かに気配は5人分だ。

じりじりと距離が縮まっているのが分かる。と、同時に、私の肌にピリピリした感覚が伝わっていく。

「俺に任せろ」

それは、さっきも聞いた台詞。だが、さっきとは違ってかわってそこには有無を言わせぬ、それでも確固たる意志が宿っており、私の信頼を勝ち取るには十分な重みがあった。

勇士が鯉口を切る。一切の音がしなかった。音をたてない「内切」とよばれる切り方でも、多少の音はなるものなのだが……

シャキィィィィィィン

そして、一息に抜刀。
右手に持った刀を左足の方に斜めに構えた。右足を軽く前に出し
ている。

瞬間――

5人がいつせいに襲い掛かってきた。
5人とも手に銃をもっている。当然、か――

勇士が地面を蹴った。

低い――

地面すれすれとも思えるような高さで、それでも尋常じゃないス
ピードで敵に向かっていく。

あっという間に一人目に間合いを詰めると、左下方から一気に刀
を右上方へときりあげた。見事、左わき腹にきまり、崩れ落ちる。
そのまま、勇士は右側にせまっていた敵にすり足で間合いを詰め
る。そのまま左にひねった体の回転を利用し、足元をはらうように
薙ぐ。

ガツツ と鈍い音が聞こえ、2人目がうずくまった。むこうずね、
それは人間の弱点だ。

これで2人クリア。そして勇士は再びすり足、残りの3人へと、
一気に間合いをつめた。そして、右足を大きく踏み込んだ態勢のま
ま、右手を前方につきだす――

私に見えたのは、そこまでだった。

勇士が刀を引っ込めたとき、ドサツと3人同時に床に倒れ伏した。

瞬殺——そんな言葉がよくあてはまる。そんな光景だった。実際、勇士がアクションを起こしてから、10秒足らずの出来事だった。

半端じゃない強さだ。勇士の剣術は華麗という言葉が良く似合う。まるで竜巻のような動きだった。

この試験官は、相当なてだれのはずだ。その試験官に反撃する隙さえ与えなかったのだ。

私は、なんだか少し勇士が恐ろしく感じた。

「やつ　いっつぜー」

くるっと勇士がこちらを振り返り、にかつと笑って再び歩き出そうとする。

私はあわててそちらへ駆け寄った。

その後も階段を上っていく途中、いくつかの罨や敵が現れたが、いち早く察知し、罨も割とたやすく抜けていく。

「理子！」

「まかせて！」

ダウン！ ワルサーP99が手の中で振動する。

目の前では試験官が胸元を抑えている。ま、防弾チョッキを着ているから大丈夫なんだけど。

「やるじゃねえか、理子」

「だからいったじゃない。信用してなかったのね？」

私は、口ではそういつつも、内心かなり嬉しかった。今までも他人に実力を褒められたことはあったが、なぜか勇士に褒められると、ドキドキする。

顔も自然と緩んでしまった。

邂逅 2（後書き）

何か、中途半端な切り方ですみません。

次でこの話は終わらせるつもりです。

邂逅 3

徐々に天井が近く感じられるようになってきた。

相変わらず、カン、カンと音を立てて階段を上っていくと、私はふと、すぐ後ろを歩いている勇士のことが気になって尋ねてみた。

「ねえ、なんで勇士は武偵になろうと思ったの？」
「……………」

聞こえてないのかな、と思って後ろを仰ぐと……………

——っ

その表情には見覚えがあった。自分を嘲り、何かを諦めたような表情。

そう……………私と同じ顔……………

「——復讐、かな……………」

ポツリと勇士がそう言った。

その顔にはやはり自嘲的な笑みが浮かんでいた。

復讐、それは奇しくも私と同じ理由だった。もちろん、勇士の言葉の裏にある重さは私には量れない。

それでも、この顔は運命に打ちひしがれたことがある人間にしかできない顔だ。

だから、ではないが私は勇士とはいいい友達になれそうな気がした。同類相哀れむ、ではないけれど、何かと理解し合える部分はあるんじゃないだろうか。

私は、これから始まるだろう高校生活に少し、ほんの少し希望が

差した気がした。

「お、ついたみたいだぜ」

後ろからの声にふと前を向くと、目の前がひらけていた。ついに、一番上まで上つてきたらしい。

やっと……ゴールか……

「お疲れさまでした。待合室までご案内いたします」

係の人に導かれ、待合室まで連れて行かれた。扉を開けて、部屋に入ると2人してソファに座りこむ。

「「はあゝ」」

そろってため息を吐く。
疲れた。

「でも、ま。楽しかったかな」
「のんきだねえゝ」

にこやかに囁く勇士にそう言ってやる。

「なあ、ひとつきいていいか？」

「なに？」

「お前、リュパンの子孫か？」

「え……………」

時間が止まった気がした。なんで…………？
なんで、勇士がそのことを知っている…………？

「ど、どうして………… あ、あんた何者…………？」

「つつーことはそうなのか。いや、峰理子という名前を聞いたことがあるような気がしてな。俺は、沖田勇士、沖田家の人間っていえば分かるか？」

私は目の前が真っ暗になるような感覚を覚えた。

沖田家。旧くからホームズ家と同盟関係を結んでいる家。ホームズ家はリュパン家は当然対立しているため、沖田家とリュパン家も敵対することになる。

なんで、と思わずを得ない。せつかく、友達ができと思ったのに………… どうして、私は普通の生活が送れないんだろっ。

普通に友達作って、家のことなんか忘れたかったのに…………
とりあえず、これ以上勇士とは、いられないだろう。

「ま、いいや。改めてよろしくな、理子」

「……………は？」

あまりにもすつと言われたから私は反応できなかった。
今、なんていった？ よろしく。よろしくって……？

「よろしくって……？」

「え？ いやいや、だから入学したらよろしくな、って……」

「はあ！？ 今の話聞いてなかったの！？ 私たち敵よ敵！」

「敵って……。それは家同士が対立してるだけだろ。つうか、俺も別に確認してきたかったただけだし。理子がなんか、シヨック受けてたみたいだから……。悪いことした、とは思ってたんだけど」

勇士はあっけらかんとそう言う。

私は思わずポカンとしてしまった。家同士が対立してるだけって……？
それってかなりの溝だと思っただけど……

「私……リュパン家の人間なの……あんた平気なの？」

「平気も何も……理子がリュパン家の人間だろうが関係ないだろ。お前はお前なわけだし。俺はさ、今日お前と一緒に試験受けて、すげえ楽しかったぜ。30分しか一緒にいなかったのに、理子の色んな面がみれたきがするしな。」

私は、しばし絶句していたと思う。始めてだった、そんなことを言われたのは。

いつもいつも私は、リュパンの子孫、リュパン4世としてしか、見てこられなかったから……

理子は理子。

勇士はそう言ってくれた。私は私。そう思っていていいんだ。そう言ってくれる人もいるんだ。

私は途端に心がポカポカしてきたような気がした。と、同時に私はさっきの認識が間違いだったと思った。

勇士の表情には確かに自嘲的なものも存在しているが、その他にも、深い優しさと、強い意志が宿っている。

勇士の目は深く、濃く、確かな輝きを放っていた。

「え……………」

気がつくと、頬を涙が伝っていた。それぐらい嬉しかったのだなあ、と自分でも思う。

慌てて、勇士にバレないようにゴシゴシこする。

ピッ

勇士が部屋のテレビのスイッチを入れた。このテレビでは他の組の試験の様子を見ることができる。

「おっ！」

勇士がチャンネルを変える。知り合いが映っていたのだろう。私もテレビ画面を覗き込む。

そこには……………！？

なぜか、一人の男が女の子を腕で体の前で仰向けに抱きかかえていた。ゆえにお姫様抱っこというヤツだ。勇士が音声を「入」にする

『フフツ、俺が絶対に守ってあげるよ。だから、少し君をお姫様に

してあげよう。武器を握るのは騎士だけでいいだろ？」

そのべったべたな台詞にしばしポツカーンとしていた私だったが、となりからクスクスという笑い声につられておかしさがこみあげてきた。

「ハッハッハ！！ さすがだぜ、キンジ！ クククッ ベたすぎんだろ！ お姫様……プ、ハッハッハッ！！！」

「ククッ、あんたの友達なの？ あれ。ハハハハッ。マジでやってるし。騎士、騎士って……ハッハッ

！ いいキャラじゃん！！」

しばらく笑いは収まらなかった。私たちは2人してしばらくの間、笑い続けた。

そして、笑いながら……私の心の中には、勇士のことをもっと知りたい。もっと勇士に近づきたい、という気持ちが強くなっていた。

「フフッ」

あの時のことを思い出すと、自然と笑いがこぼろていた。

今思えば、私はすでにあの時勇士の惚れていたのかもしれない。

私は空を仰ぎ見る。

「あっ！」

少し、都心から離れたからだろうか。夜空に、一つきらりと光る。

一番星、見つけ。

思わず心の中で呟いてみる。

私は頬笑みをたたえて、武偵局のエントランスに入っていった。

武装巫女

「ア、ア、アリアを殺して私も死にますぅー！」

ガキイイ！

俺の刀と白雪の日本刀が交錯する。火花が散った。

火花！？

こいつ……本気で殺す気で振ってやがる！？

「白雪！？ それだとアリアと心中だぞ！ いいのか！」

ガキイー！！ 聞こえてねーし！！

その時、白雪がまとう雰囲気が少し変わった。
そして、強烈なオーラがビシビシとんでくる。

これは……！！ ヤバい！！

「アリア！ スイッチ！」

俺は白雪の相手をアリアに任せ、キンジに近寄る。

「キンジ。ドンマイ。

で、どうする?」

「……………どうもできん。好きなだけやり合ってくれ」

「いいのかよ。白雪、オーラ変わってんだけど」

「大丈夫だろ。あいつもそんなに簡単に解禁したりはしねえだろ」

妙なところで信頼してんな。白雪のこと。

よし、それなら……

バツ

俺はベランダに向かって一直線。

「あ、勇士！ 待ちやがれ！」

ベランダには防弾物置があるんだよ。……………一人分のな。

「G o d L u c k !」

俺はキンジに親指を立てる。

裏切ったなあアアアア……………という声を背後で聞きながら防弾物置の扉を閉める。

やれやれ、ご愁傷さま。

星伽白雪は武装巫女だ。白雪の実家である星伽神社は古くからご神体を守るといふ目的で武装している。

そして、強い。滅茶苦茶。

少々剣には腕があると自負している俺も本気の白雪には勝てるかどうか怪しい。

音が止んだところで物置から外に出てみる。

そーっとリビングにでてみると……無事なもんがねえじゃねえか！

部屋のいたるところに鉛弾が撃ち込まれ、こっそりお気に入りだったソファは見るも無惨にズタズタにされている。

「はぁ……はぁ……なんて……しぶとい、どろ、ばう、ネコ……」

白雪は日本刀を杖のようにして立っている。

だから刺すなっつうの……ここ二階だから下手したら床突き抜けるから……

「あ、あんたこそ……とつとと、くたばり、なさいよ……はふ、はふ……」

アリアは今にも仰向けに倒れそうなところを必死に腕で支えている。

「ん？ キンジは？」

「……勇士」

「……——！……！」

背後から怨嗟が聞こえる。そつと振り返ると、
「キンジ!？」

顔面真つ青のキンジがそこにいた。

「え!？ お前………え!？」

「ずつと冷蔵庫の中に入ってたんだよ。あれは防弾だから………」

あゝ、なるほど。つつかやべえ。罪悪感が半端ない……

仕方ないここは俺が調停大使役を務めるか。

「で？ もう気が済んだろ」

俺が2人に向かってそう言つと、

バツ、ズシャアアアア。

おうっ！ 見事なスライディング土下座！

白雪がキンジの目の前に土下座して、

「キンちゃんさま——!」

キンちゃんさまって……

「し、死んでお詫びします！ キンちゃんさまが私を捨てるのなら、
ここで切腹いたす!！」

最後キヤラ変わってるし……

しかし、面倒だな。

「キンジ、そろそろ何とかしろ」

キンジ、白雪を説得中……………

まあ、基本白雪はキンジのいうことは信じるし、問題ないと思うけど……

ほら、白雪の顔がだんだん穏やかになって、

「よかった。じゃあキンちゃんとアリアはそういうこととしてないんだねえ」

「？　そういうことって？」

「キス、とか」

……………

時間が、止まった。

キンジはどんどん顔が真っ青になっていくし、
（お前、貧血でたおれるんじゃないかねえか？）

アリアはみるみる顔が赤くなっていく。

そして、2人が黙ると自然……

「してないんでしょ？　勇士君」

俺に矛先が向いてくる。

……………

「あゝ、えっと。してたぞ、キスは」

俺の脳内コンピュータは正直に言うのが一番傷が広がらないと決断を下した。

と、しばし絶句していたアリアが

「だ、大丈夫よ！ こないだ調べたけど、子供はできてなかったから！」

……………白雪の体から何か白雪の形をしたものがヒューと抜けていった。

キスしたら子供が出来るって……コウノトリより中途半端に生々しくてやだな……

その後、アリアは図書館などでおしべ、めしべレベルから調べたらしく、中学生の保健体育の教科書を持ち歩いていた。（おいおい

………)

そして、キンジの顔を見る↓赤くなる↓蹴り飛ばす↓キンジが仰向けに倒れる↓赤くなって蹴り飛ばすというスパイラルを何度みたことだろうか……

結果、アリアの知識改善になったし、よかったじゃねーか！とキンジにいうと、満身創痍のキンジは怨嗟のこもった目で俺のことを睨んできた。

救いだっただのは白雪がまったくコンタクトしてこなくなったことか……キンジの姿を見ると小動物のように隠れてしまう。

そんなある日の昼下がり――

「遠山君、沖田君、ここいいかな？」

まるで光り輝くオーラをまとった少年がそこにいた――！！！！！！

わけではなく不知火亮がそこにいた。

不知火は強襲科のAランク武偵。武術、頭脳、メンタル、フィジカル身体の強さどれをとっても信頼が置ける能力を持った全範囲手だ。オールラウンダー

俺もよくこいつとは組んでいたけど、相当頼りになる。

イスを引いて、俺の正面の席にきっちり左から座った不知火は俺にニコツと笑いかけると、

キャーーーーーッ!!!
とすごい歓声があがった。

……そう、武藤がもっていたトレーをひっくり返して頭からかぶるほど。

「不知火君と沖田君よ!!! 不知火×沖田よ!!」
「も、萌え〜ッッ」

「不知火君、かつこいいよね〜。沖田君の受けはもう最高でしょ!」
「!」

ぶっ殺すか、こいつら全員……
「アチィッ」

目の前の不知火は相変わらずニコニコしているが微妙に困ったような顔をしている。否定っぽいおしろよな、お前も。本気で誤解されるぞ。

「アチ、アチ、アチィーーーー!!!」

てかキンジはニヤニヤしてんじゃねえよ。まあ、アリアはなんのことだかわからずに首かしげてるけど、

「熱っ、半端な熱っ」

全く武偵高の女子はどいつもこいつも、なんつつか……テンションがいつもいっもおかしいんじゃ……

「って、助けるよ!!!!!!」

いい加減無視するのがきつくなってきた。ちなみに武藤が頭からかぶったのはラーメンである。

「大丈夫かい、武藤君」

「ほれ、ウェットティッシュ」

俺と不知火が心配そうにのぞきこんでやると、う、ラーメンくさい。つつか火傷したかもな。あれ、そういえばキンジは？

バsshャー——————ン!!!!!!!!!!

滝のような雨が降ってきた。

おう、ぬれ鼠。

キンジとアリアのコンビネーション、バケツ水ぶっかけをくらった武藤は見事ずぶぬれになった。

「大丈夫、アンタ？」

「大丈夫だ。武藤は火傷しない」

キンジがはつきり言い切った。

その光景を呆然と見ていた俺含め、食堂の皆さんはとりあえず持っていたポケットティッシュを武藤に差し出した。

「まったく、ひどい目にあっただぜ」

「まあ、そんな日もあるさ」

「ねえよっ！」

俺の励ましも届かない。

「それはそうと、遠山君。星伽さんと何かあった？」

不知火が相変わらずのニコニコ顔で聞く。

不知火がこんなことを聞くとは、何かあったな。

聞けば、白雪はどうやら、今朝花占いをしてたらしい。なんと古風な。つつか……

「おい、キンジ。やばくないか、白雪、危なげなんだけど……」

「……だいぞうぶ……」

たっぷり間を取った挙句、噛んでんじゃねえか……

「なんかあったのかい、沖田君」

不知火が矛先をこっちに向ける。

「ま、色々な。大丈夫、何とかなるさ。キンジだからな」
「そうだね。遠山君だからね」

そして2人で笑いあう。またキヤー！と声上がるが黙殺。

「それはそうと勇士、おめえ、強襲科に戻ったそうだな」

武藤が片眉をあげてそう言う。

「あら、そうなの？」

「おい、アリア。朝のホームルームの前強襲科に顔出したろ」
「気付かなかったわ」

こういうヤツだ。ま、めでたく現場復帰をやつた。ははっ

「ま、あんたが強襲科に戻ってきたのはうれしいことだわ」

「また、運んでやるぜ」

「また沖田君と組めるんだね。楽しみだよ」

「ふん、自分から死ね死ね団に戻るなんて、気がしれねえな。ま、頑張れや」

みんな憎まれ口を叩きながらも俺にエールをくれる。ほんとはいいやつなんだよな、こいつら

午後の授業の予鈴が鳴り、俺たちは慌てて席を立った。

その時、不知火が俺の耳元でぼそぼそと囁いた。

「このところ、峰さん、欠席してるよね。あのハイジャックからずっと。沖田君、何か知らない？」

……まったく、いい勘してるよ。わざわざそれを俺に聞くってことはな。そして、この質問は俺のことを心配してくれてんだろぅな。きつと。

俺はわからん、と言うと、不知火はそっか、といって食堂から出て行った。

武装巫女（後書き）

やっと、やっと……投稿でき、まし、た……ガクッ

テストが、あったんですよ。あの、白い悪魔がやって来てたんですよ。

そして来週からはテスト返却……

今度は赤い悪魔の襲来です……ああ

さてテストの話はここまでにして……ほんっっっつとー！
ーにすみませんでした！！

やっぱ週一は難しいですね。いや、言い訳ですね……ハイ。でも、投稿は止めません、ハイ。言った。言っちゃったぞ、俺。

ええと……これからもしょろしくお願い申し上げます

真剣白羽取り

朝である。

本来ならば、キンジが寝ているベッドが空っぽになっている。

俺はむっくりと起き出し、洗面所でバシャバシャと顔を洗うと、外から騒がしい声が聞こえてきた。

バコツ 痛えっ!!

外に出てみると、アリアとキンジが向かい合い、何やら訓練をしているらしい。

らしい、というのはアリアが刀の峰でキンジをポコポコ殴っているだけだからだ。キンジは頭の上で手をフラフラさせて……盆踊りでも踊っているみたいになっていた。

「よー朝から精が出るねー」

俺が近付いて行くと、アリアとキンジが振り向く。驚いたことにアリアはチアガールの衣装である。へえ似合うじゃん。

「つつか、キンジ泣きそうなんだけど。何のトレーニングしてたんだよ」

「真剣白羽取り（エッジ・キャッチング）よ」

アリアがこともなげに答える。

真剣白羽取り（エッジ・キャッチング）とは……また難度の高い……つつか実戦で使う機会ってあんまねえし。

とかいうと、ここまでポコポコ殴られているキンジがあまりに浮かばれないので、黙っておく。

「勇士、助けてくれ。このままじゃ俺、頭部挫傷で死んじゃう」

「何よ、大袈裟ね」

「大袈裟じゃねえ！ ポコポコ叩きやがって……だいたいこんなの練習してできるもんでも……勇士だってできねえんじゃないのか？」

「え、俺？」

突然振られた俺はアリアと目があつてしまふ。その時、ニヤアと笑った。アリアが。うわー、この流れは……

「ちょうどいいわ！ 勇士、やってみなさい」

やっぱりね。はあ、ったく。

「分かったよ。やったことねえから、峰で頼む」

俺は一步下がって、構えを取る。あくまで自然体、それが俺の構えだ。

そして視界にアリアを捉える。だんだん視野をせばめていき、視界にアリアしか残らなくなる――

刹那、俺の眼前には刀が迫って来ていた。力みを取れ、本能で動け。それが天然理心流、ひいては沖田総司のスタイル――

ぱしっ

見事、刀の刀身は俺の両手にはさみこまれていた。ふう、とため息を吐く。

「さすがね、初めてで成功させるなんて」

「すげえ、自信なくなってきた……俺」

アリアとキンジはそんなことを言う。

「ま、基本は剣の教えだしな。キンジ、ひとつアドバイスしてやろう。大事なのは、集中することだ」

「は？ そんなこと、分かって——」

「いや、そういう意味じゃない。ここから先は自分で答えをみつけな」

俺はそれだけキンジに言うと、寮の自分の部屋へと戻った。

「ちっす」

俺は教務科の「綴」と書かれたドアを開けて部屋に入っていった。中にはたばこをくわえて、明らかラリってんだろ、とつつこみたくなるような女性とよく見なれた女生徒がいた。

「白雪」

「勇士君」

俺が呼びかけると白雪は伏し目がちに返事をしてくれた。

「よゝ、来たか、クソガキい」

「おう、きてやったぜ、オバハン」

俺の物言いに隣の白雪は目を丸くする。

そもそも、武偵高の教師というものは、危ない者の塊みたいなものだからだ。

前歴を聞くと、傭兵、マフィア、殺し屋…… e t c

この尋問科の綴タギユラという教師はその危ない連中の筆頭みたいなやつで、年中タバコを吸っており、目の下にはいつも隈が出来ている。

生徒からは恐れられているため、普通言めた口などはきけないのだが……

「ん？ 太ったか？ オバハン」

「アンタも生意気加減がましたんじゃねえの？」

俺はこんな感じである。というのも俺がいつも綴シイの尋問に協力しているからなのだが……

「で、何の話だ？」

「星伽の好きな男の話だ」

「ええええ！？」

白雪は慌てて立ち上がると、顔を真っ赤にさせた。武藤がみたら幸せのあまり、昇天しちまいそうな表情なんだが……

「ひゃっひゃっひゃっ！ その様子だといんだ？ だれだ？ 知つてつか？ 勇士」

「え、まあ、多分」

「勇士君！」

曖昧に返事した俺に白雪が怒る。

「ああ、悪い。で、本当の用件はなんなんだよ、妖怪」

「ディランダル魔剣の話さ、クソチビ」

俺は身長170センチでチビじゃない——じゃなくて、え？ ディランダル魔剣？

「聞いたことは、あるね？」

「ああ、超偵ばっか狙う野郎だろ？ っておい待て、まさか白雪が

——」

「理解が早くて助かる、だが、そこまでの事態にはなっちゃいねえ」

どうやら、白雪はディランダル魔剣に狙われている、可能性が、あるらしい。

「白雪、心あたりがあるのか？」

「うっん、そもそもディランダル魔剣なんているかどうか分からないし……」

「今日、呼び出したのはアタシだよ。最近コイツの成績が落ちてき

てたからな」

ふーん、でも、俺にこの話をする理由って、

「アンタに話したのはアンタも狙われてる可能性があるからだよ、クソジャリ。^{ディランダル}魔剣はその名の通り、剣使い。という噂。アンタは憎らしくも、うちで一番の剣使いだろう？」

ところどころに罵倒が入りつつも、一応綴^{コイツ}は俺のことを認めてくれているらしい。

「で、星伽イ？ いい加減ボディ・ガードつけろってば、諜報科^{レポート}からも報告書がでただろう？」

「でも、あたしが狙われるなんて、あり得るでしょうか？ 勇士君ならまだしも、私なんかじゃなくもつと大物の超偵を狙うでしょうし……」

その謙遜は嫌味にしか聞こえんぞ、白雪。お前の実力は本物だよ。と、心の中で思ったが、口にはださずにいた。

その後も、綴と、白雪はもめていた。どうやら白雪がボディ・ガードをつけたくないのは、キンジの世話をしたいかららしい。何と健気な……ま、時にはそれが重いんだけどな。

アリアと白雪を足して二で割ったら、ちょうどいいんだがなあ、などと考えてみる。ま、そんなことを考えていても仕方がない。

「なあ、人外。それなら俺に一つ案があるぜ」

「……言ってみな、ハゲ」

「ハゲてねえよっ！ ……ああ、ようするに白雪と綴の望みを同時に叶えればいいんだろ？ おい、そこにいつまでもいねえでてこ

いよー！」

俺はだれもない空間にそう呼びかける。白雪と綴が怪訝そうな顔をした瞬間、

バコン！

天井の換気ダクトが外れ、何かが降ってきた。俺の上に。

「んぎゃっ！」

潰される俺。

「んぎゃあ！」

さらに重さが増した。もう一体降ってきたらしい。

と、綴が俺の上の二体の襟首をつかんで壁際に投げ飛ばした。すげえバカ力……

「そのボディーガードの件、私が請け負うわ！ 無料でね！」
「っておい！ 俺に相談もなしに！」

どうやらキンジに発言権はないらしい。

「で、勇士。あんたの案つてのは……」
「おう、この二人にボディー・ガードをやらせよう」
「でも、白雪は……」
「キンちゃん！」

アリアがキンジにガバメントをつきつけるのをみて悲鳴を上げている。

「ほう、なるほどな。そういう人間関係か。面白いな」

教師的には面白がっている場合じゃないと思うんだが……まあ、そこが綴クオリティってやつだろう。

「で？ どうすんのさ、星伽は？」

「……じよ、条件があります」

白雪は両腕をピンと真下にのばして、涙目をギュッと閉じ、

「キンちゃんも私の護衛をして！ 24時間体制で！」

そう言い放った

「私もキンちゃんと暮らすう！」

とりあえず、キンジの寿命がまた少し縮まった。

「！ あら、沖田殿ではないですか」

俺が声をかけると猫じゃらしの少女が俺に気付いて振り向く。と、自然猫じゃらしの手も止まった。

「え！ ゆーしくん？ た、助けて！ 死んじゃう！ 死んじゃあひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

無情にも、台詞の途中でまたも猫じゃらし。つつつか、猫じゃらしってそんなにくすぐったいかな？

この爆笑している女の子は平賀文。装備科のAランク武偵で、何でも江戸時代の発明家、平賀源内の子孫らしい。腕は確かで、プロガンスミスの銃鍛冶も四苦八苦するような改造を自宅でアニメをみながら、鼻歌交じりにやってしまう凄い人だ。

みかけは——小学生にしか見えないけど。

「いい。すごくいいよう、文ちゃん。その顔。最高だよ」

そしてこのイロイロ危ない女の子が岡崎正宗。おかざきまさむね身長150、ボロボロのつなぎに眼鏡。こちら小学生にしか見えない容貌をしている。名前からも分かるように、名匠刀鍛冶、正宗の子孫である。

普通、刀は材料からの精製に、刀鍛冶、彫師、鞘師、研師とたくさん職人を要する。が、この目の前のちゃんまりしたやつはそれをすべてやってしまうのだ。

そのため、装備科のSランク武偵、秘密兵器なのだ。

つまり、超優等生。……この癖さえなければ。

「ぐえっへっへへえ」

手をワキワキとさせながらゆっくりと縛られている平賀に近づいていく。涎でてるよ……

この正宗、ドSなのである。特に、幼児体型の可愛い顔をした女の子を前にすると理性を失う。

アへ顔で頬がゆるみっぱなし、涎を垂らして気味悪い笑い声を立てている様子は、……なんというか、いろいろ残念である。

顔立ちは整っていて、十分美少女の分類に入らと思うのだが……

コッソ

「っ痛！」

「おい」

とりあえずこのままでは（ピー）が（ピー）になって（ピー）しそっだしな。

「何をするのだ、沖田殿」

「我にかえれ、変態」

俺に叩かれた頭をさすりながら、こちらを向く。とりあえず、平賀を縛ってあるひもをほどく。亀甲縛り……

「変態とはなんだ、変態とは！ 私はただ自分の欲望に真っ直ぐなだけだ！」

「お前の場合はそれが変態への一本道なんだよ！」

「失礼な！ いくら沖田殿といえども、聞き捨てならんぞ！」

ほほお、ここまで言っても聞かんか、ならば……

「それなら……今、平賀に何しようとしたんだ？」

「そんなもの、（閲覧削除）して、（閲覧削除）で（閲覧削除）だ！」

「台詞の8割、（閲覧削除）になってんじゃねーか！」

「そういう、沖田殿こそ、文の苺パンツをずっと見ていて、話しかけなかったんじゃないのか？」

「はあ！？ 誰があんなガキっぽい苺パンツで喜ぶと思ってんだ！？」

「ほら！ やっぱり！ っていうか、苺パンツに素晴らしさを沖田殿は理解していないのか？」

「知らねえよ！」

「あのう……」

何だ、話の腰を折りやがって……と振り向くと、平賀が顔を真っ赤にして気まずそうに立っていた。

「あんまり、人のパンツを叫ばないで欲しいのだ……」

「「……………」ごめん」」

とりあえず、謝った。

「ひどいのだ、マサムネちゃん」

「文が可愛いからいけないのだ。可愛いものを見たら苛めろ、が私のポリシーだ」

「とりあえず、そのポリシーを捨てろ……」

じゃねえと、お前いつか人間から脱落するぞ。

「つつつか、なんで鍛冶場でやってんだ？」

「そんなもの、暑さで汗を出して、意識を朦朧とさせるためだ！」
「……………」

言葉が出なかった。

涙目になっている平賀をさておいて、俺は正宗に一瞥をくれる。

「ほら、やろうぜ」

「うん、よろしく頼みます」

俺がそばに置いてあった、柄の長い大きな金槌、向槌と呼ばれる工具を手にすると、正宗は竈の戸を開けた。と、ムアアと熱気があふれ出てくる。中では煌煌と赤い焰が燃えている。正宗は金鋏でな

かから、タタラとよばれる、材料を取り出す。それはオレンジ色に燃えている。

「とりあえず、10回!」

「あいよ!」

俺は向槌を振りかざしてタタラに打ち付ける

ガキイイイン!

と音がして火花が散る。これは折り返し鍛錬といって、鉄を叩いて強度を上げる作業である。この作業は2人じゃないとできない。つつつか、普通刀鍛冶の作業は最低でも2人でやるもんだ。それをこいつは一人でやってんだもんな。

キイイン! キン! と音がする度に、火花が散る。コツは腕じやなく、腰をつかって振ること。

鉄同士が立てる音に心地いい。その作業は30分ほど続いた。

「で？ 出来てるのか？」

「出来ておりますよ、沖田殿」

正宗が奥から菊一文字則宗を持つてくる。

俺は研ぎ作業を正宗に依頼していた。その代金はさっきの手伝いである。

「研ぎ作業、ばっちり終わっております」

「ありがとうございます」

「……………一刀鍛冶としては少し心が痛む使い方であるが……………」

それに関しては言葉もない。ハイジャックの時、コンクリートを切り裂いたのだ。そりゃあ、ダメージも強いだろう。

「ごめんな……………」

「いえ、沖田殿に不満があるわけでは」

こいつは武偵中学時代から俺に尊敬の念を持っている、なぜか。

本人にきくと、刀鍛冶として、剣士に心打たれるのは当然であるのです。などというが。

「ありがとな、本当に。いつもいつも」

「いえ、私としては、ありがたきことこの上ないです」

そういつてにつこり笑う。ここだけみれば、ここだけみれば可愛い女の子なんだけど、なんで…なんでこんな残念なんだ……

「うむう……沖田殿が何か失礼なことを考えている気がする」

「んえ！？ そんなことはないぞ」

鋭いやつだ。

「にはは〜。そうやってると2人恋人同士みたいですのだ！」

「ふえ！ そんなことは、そんなことはない！ 沖田殿にそんな気持など私は……」

顔を真っ赤にしてアタフタしている正宗は実に可愛い。実に可愛いからこそ、あのドSさえなければ……

「それさえなければっ！ くう〜 残念！」

「コメディアンみたいな締め方するな！ 絶対失礼なことを考えているだろう！」

「気のせいだ！」

「爽やかだ！ 笑顔がさわやか過ぎる！」

そんなバカなやり取りをしていると、平賀が笑っている。

「それにしても、ゆうしくんの刀はマサムネちゃんが創ったのだけ

「？」

「ああ、腕は確かだから」

「いや、文の技術には及ばないよ私は」

そういう風に謙遜している平賀はかすかな誇らしさを纏っていた。

「そういえば、2人は中学からの付き合いっぱいけど、最初っからウマがあったの？」

平賀がそう言う。

「まさか、最悪の出会いだったよ」

俺たちは声をそろえてそう言う。

あれは3年前のことだ――

刀鍛冶 2

正宗 side

装備科とは、前線にでていく武偵の武器、服などを製造、売却し戦闘のバックアップ的な役割を担っている。

「文ちゃ〜ん、胸さわらせて〜」

「嫌ですのだ！ 忙しいからって」

装備科には、武器の修理から、改造まで様々な依頼が飛んでくる。そして、それは必然S、Aランクの人間への依頼が多くなるのだ。自分や平賀文のように。

「ふえ〜、気が遠くなるね、この量は」

目の前の紙の束を思わず両手で舞いあげてしまいたい衝動に駆られる。

まあ、そんなことできるわけもなく、おとなしく一番上の紙から片づけることにする。

「文ちゃ〜ん、よみあげてよ〜」

「あい！ まずは強襲科から、9ミリ弾30ダース……」

「……売るのは構わないけど、取りに来させてね、それ」

「はい、取りに来てもらう、と。次は車軸科から……永久エンジンの開発ってできませんかね？」

「できません、却下」

「筋力があがるトレーニング機を……」

「筋トレしろ」

「銃を電磁砲レールガンにしてください」

「どこぞの黒猫に頼め」

「お金、貸して下さい！」

「利息が十でよければ」

「波動砲、創って！」

「創って、何を攻撃するんだ！」

なんか、すごく腕のいい便利屋に見られてないだろうか……？
すごくすごく、不安になってきた私に、尚も文が話す。

「刀、一本頼みます。強襲科、沖田勇士。あれっこれって……」
「またか……今月に入って3本目だ」

この沖田勇士という者からの刀の依頼は今月でもう3本目。私が
うった刀でないとはいえ、装備科の刀もそれ相応の強度をもってい
る。それを、もう3本？

「どうせ、刀を床に叩きつけるとか、野蛮な使い方してるんだろ
う」

「うーん、分らないですのだ……」

「しゃーない、ひとつ文句を言ってこよう」

「でもでも、今日は確か、強襲科は午後から全員、任務にでている
はずですよ」

「……その沖田勇士が受けた任務分かるか？」

「ええっと、ちょっと待ってなのだ」

文はそういうと、パソコンに向かって調べ始める。私はパソコン
はサッパリ何だが……

「わかったですのだ。沖田君の受けた任務は『ヤンキー狩り』。場所是有楽町」

「……………そんな任務が平然とあるんだな。まあいい、ちょっといつてくる」

「いつてらっしゃいのですのだ」

有楽町につくと、私は細い路地に入ってみた。薄暗く、じめじめして気持ち悪い。我ながら、なんでこんなところまで来たのだろうか。

ひょっとしたら、彼が私が刀を打つレベルの人間だと期待しているのだろうか。まあ、そんなことはたぶんありえない。

目の前に薄暗い廃ビルが現れた。心なしか、中から騒がしい声が聞こえる。

パン、パン！

銃声。私は慌てて廃ビルの扉に背中をつけて中を窺う。

死屍累々。その中央に彼はいた。一本の刀を携え、目の前のボスらしき男と対面している。

その男が手にしているのは……M60マシンガン。

どう見てもピンチである。私が入口で入るべきか入らざるべきか逡巡していると、沖田が喋り出した。

「てめえらみてえな、弱い者を蹴って、優越感に浸ってる連中は絶対許せねえ。2度と立ち上がれなくなるぐらい、ボッコボコにしてやるよ」

「はっ、やってみな、刀一本でマシンガン相手に何が出来るってんだ？ ええ？」

確かに男の言う通り、マシンガン相手に刀では分が悪すぎる……

「おい、本当に撃つぞ」

「撃つてみるよ、腰ぬけ」

ババババババババババババツ

マシンガンの銃口が綺麗に光る。

「ヒヤハハハハ！　ざまあねえなあ、武偵さんよお！」

男は勝利を確信したように高笑いし、砂煙が舞い上がっている。
マズイ。今出ていけばまだ沖田は助かるかもしれない。そう思って
出ようとした時。

「ふん、こんなものか」

砂煙の中から声が聞こえてきた。人影。

まぎれもなく沖田勇士その人である。驚くべきことに無傷で立っ
ている。

あの、銃弾の嵐をすべて防いだというのだろうか――

「お、お前一体――」

「黙れ」

一瞬。ヤンキーはその場に倒れていた。

くるっ

「！」

不意に沖田がこちらを振り向いた。気付けば私の体は物陰からで
ていた。

「……………あ」

私が口を開きかけると、

「おいおい、子供がこんなときちゃダメだろう」

などとのたまわりやがった。

確かに私は小柄なほうだが……

「子供は、早くおうちに」

「うつさいわああああ！！！！」

気付けば私は目の前の男に蹴りを繰り出していた。そして綺麗に
振りあげられた足は者の見事にストライク。沖田の股間に。

「きゃああああああ！！！！」

「ぎゃあああああああ!!」

2人の悲鳴がシンクロする。

「てめえ、いきなりなにしゃが……うえっ」

「こつちこそ気持ち悪いもの蹴っちゃったじゃないのよ!!」

「てんめえ……」

沖田は自らの股間を抑え、苦しそうに悶絶している。

「ところで、あんたあの剣を何本も折ってる沖田勇士よね」

「人の股間けつとばして、謝りもなしかよ……まあ、そなんじゃねえの?」

「なんでそんな折れんのよ?」

「知るか……普通に銃弾はじいたり、コンクリ斬ったりしてるだけだ」

「世間一般では、それは普通とは言わないのよ!」

なんとも荒っぽい使い方である。それもコイツにしかできない、見事な剣技を用いてしか。

「氣に言ったわ! いえ、氣に入りました。沖田殿。私に、この岡崎正宗に刀を打たせてもらえぬか?」「——?」

突然口調が変わったあたしに、沖田殿は戸惑っているが、それでも正宗の名は聞いたことがあるらしい。

「自信があるのか?」

「ええ、最高の一品を仕上げて見せよう」

私がそういって、右手を差し出すと、沖田殿はフツと笑って私の右手をしっかりと握った。

「っていうのが出会いだ。最悪だろう?」

「ホントにな。股間を蹴られるとは思わなかったぜ」

いまだに俺はあの時の股間の感触がわすれられない。

「なるほど、ふたりは下半身の関係というわけですか」

「「違うわっ!」「」

同時に突っ込む。ったく。

「ま、これからもよろしくな。正宗」

「こちらこそだよ、沖田殿」

正宗はそう言って笑った。

かこのとり 1

ディランダル
魔剣

その名自体は有名だが、問題はその所有者の方だ。ディランダル魔剣ほどの名剣を扱うためには、剣の腕も相当なものでなければならぬ。本当に存在するとしたら……勝てるだろうか。

そんなことを考えつつ、第3男子寮に着くと、何やら部屋の中が騒がしいな。

相変わらず、爆弾でも爆発したんじゃないかと思うような部屋が広がっている。

とりあえず、ソファだけでも買いなおさなきゃな……

「遅いわよ！ 勇士」

頭の上の方からアリアのアニメ声が聞こえてくる。見上げると、脚立の上でアリアが小型カメラのようなものを取り付けている。

「ただいま。何やってんだ？」

「赤外線センサーよ。この部屋を要塞化するわ」

「…………願わくば、この部屋でのバトルはあれつきりにして欲しいな」

「何言ってるの、ちょうど色々ぶっ壊れたし、ちょうどいいわ」

正確にはお前と白雪がぶっ壊したんだが……それを口にするほど俺も愚かじゃない。

「キンジは？」

「白雪と買い物に行ったわ。そろそろ戻るんじゃない？」

「買いものね……白雪のアワアワしてる様子が目に浮かぶな。緊張でおかしくなんなきゃいいけど。」
ガチャ

「ただいま」

「よう、おかえりキン……」

キンジが白雪をおぶってそこに立っていた。

「キンジ、お前、何をした」

「俺が何かしたって前提かよ！」

「いや、そりゃあそうでしょ。天然ジゴロのキンちゃん」

「やめろ……別に、買い物の帰りに、夕飯楽しみにしてるぜって言うて……」

「うんうん」

「白雪はいい嫁さんになるなって言ったら、突然ボンツて音がして気絶した」

「うんうん、なるほ……っておい」

「？俺なんかマズい事いったか？」

キンジにとつては非常にマズいことであろうが、まあコイツが鈍いのが悪い。俺はキンジの顔に自業自得と書いてあるのが見えた。

「とりあえず、白雪は寝かしといて要塞化しちやおうぜ！」

「しねえよっ！ そんな軽いノリで」

「いいから、アリアに従うのが一番丸く収まる」

「……………」

微妙な顔をしてうなだれるキンジ。俺はその手のひらに赤外線センサーを握らせた。

大方作業も終わりに近づいてきた。キンジは白雪の荷物の整理を手伝っているらしい。俺も手伝うか。そう思って、今日から白雪が使う部屋のドアをあける。

ガチャ（↑俺がドアを開ける音）

ピシッ（↑白雪の下着を握りしめたキンジが固まる音）

パタン（↑俺がドアを閉める音）

「もしもし……警察ですか？」

俺の親友は……変態だった。

「まで、勇士！俺の話を聞いてくれ！」

「話せ！変態と話すことなど何もない！」

「あれ、キンちゃん？勇士君？何やってるの？」

おお、白雪。ちょうどいいところに。

「聞いてくれ白雪。キンジはな……お前の下着が欲しくて欲しくてたまらないらしい。愛しているといっても過言ではないそうだ」

「ちよっ、おい待て勇士！あることないこと言ってるじゃねえ！」

たしかに若干の脚色はくわえたが、これで白雪も軽蔑してキンジから離れるはず……そうしないと白雪の身が危ない！

「えっ……キンちゃん……？」

よし、いいぞ！その調子で……

「ごめんね……気付いてあげられなくて……」

うんうん、そう……って、え!?

「はい、キンちゃん」

そう言っ^て白雪は、今まで穿^きいていたパンツを脱いでキンジに差し出した。

「へ、変態だあ—————」

この日、俺の身の周りは変態ばっかだということが分かりました。

その後もキンジは白雪のボディーガードを続けているようだ。ただ……白雪はどうやらまだ『かごのとり』のままらしい。

星伽の巫女はどうやら自由な外出を禁じられているらしく、同級

生に遊びに誘われても断っているらしい。とキンジがいつていた。
まあ、それについてはキンジがなんとかしてくれるんじゃないだろうか。なんせキンジだし……お姫様は王子様に任せるか。

などと思っていた矢先、昼休みに食堂に行くと、隅の方で一人で食べている白雪を見つけた。

「よう、白雪」

「あ、勇士君」

「どうよ、ボディーガード付きの生活は？」

「へへへ、幸せだよ」

そんな蕩けそうな笑顔で言われちゃあなあ。ホント幸せ者だよキンジは。

「聞いたぜ。白雪。禁止されてるのか、外出とか」

「……………うん、まあね。でも大丈夫だよ。私は、キンちゃんのそばにいらればそれで幸せ」

その言葉は嘘ではないのだろう。けど、その表情には一抹の翳りがある気がする。何か、妥協というか諦めというか。

それも当然かもな。白雪だって年頃の女子高生だ。遊びにだっていきだろつに。それに、学校でも思ったが、白雪は少し浮いている気がする。けっして悪い意味ではなく、みんな白雪に気後れしてというか、一歩引いた位置にいる気がするのだ。

「キンちゃんね、小さいころ、私を外の世界に連れ出してくれたんだ。私がダメだよっていうのもきかずに。私はその時始めて外の世界を見たけど、きれいだったなあ。なんかキラキラしてて。今でも忘れないもん」

…………… 本当に敵わねえな、あいつには。付き合いの長さでは俺とキンジと白雪は変わらないのに、白雪がキンジに惚れた理由がなんとなく分かる。

「だから、私は『かごのとり』でもいいんだ。今は……ううん、これからもずっとキンちゃんのそばにいたいから」

白雪はそういつて笑う。なるほどね……… そういわれちゃあ、俺は何も言えねえわ。でも……

「白雪。大丈夫だ。信じろ、お前のキンジを。あいつならまた、お前を知らない世界に連れ出してくれるさ」

俺がそういつと、白雪は少し驚いたような表情をした後、はにかんだような笑顔で笑った。これでいいんだろう。

「…………… だから、あんまアリアとケンカすんなよ」

一番俺が言いたかったことはいえたし。

その日、寮に戻る前にコンビニによると、見覚えがあるピンク髪。

「あ、勇士」

「おう、アリア。その大量のももマンは……」

「もちろんアタシが全部食べるわ」

そういうことをききたかったんじゃないのだが……

太るぞ、と言う勇氣は俺にはなかったので、2人で部屋にもどる。
で、ドアを開けると……

「キンちゃん、やめて!」

「おとなしくしろ!」

キンジが白雪の両腕をつかんでいる。上半身裸で。そして、白雪の上着がはだけているところまで確認した俺は……

「もしもし、警察ですか……?」

すごい既視感を感じつつ、電話をかけていた。強姦である。

「こんのおおおお……」

そして、俺の横では、般若がいたのだった。

「ギアアアアアアアアアアアアア」

パッリン

キンジの身は東京湾の海の藻屑と化した。

かこのとり 2

「Don't mind」

「うるせえな！ お前も楽しんでたじゃねえかよ！ うげっゴホッ
ゴホッ」

「ほらほら、大人しくしないと……」

「！ お前！ 後ろ手に何か持ってるな！」

「ふっふん？ 勇士特製ブラマンジユ 冷たくてうまいぞ」

「……ゆ、勇士。おまえ、お前ってヤツは（涙）」

な、泣くことないだろうに。よっぽど、アリアと白雪の共同生活
に精神を削られたッぽいな……

うまそうにブラマンジユをほおばるキンジを眺める。

「なあ、キンジ。許してやったらどうだ？」

「……」

「アリアはさ、かなえさんを助けようと必死だ。もちろんそれを抜
きにしても人の話は聞かねえし、キレやすいし、唯我独尊だけど。

それでも、その想いは汲み取って……」

「分かってんだよ」

「え？」

「分かってんだよ。あいつがかなえさんを助けたいが為に回りが見
えなくなってることも、魔剣ディランダルっつーいるかどうか分からないモンを
逮捕しようとしてることもな。心配すんな。俺は来年の四月、武偵
高をやめるまではアリアに協力する胎なんだからよ」

……… こういうところなんだよなあー。

こいつがモテる理由が分かる気がするぜ。

ま、そういうことみたいだぜ。俺は扉の方を一瞥する。その隙間からは慌てて遠ざかっていくピンク髪が見えた。

「じゃあな、ゆつくり休めよ」

「おう。ブラまんじゅうセンキューな。うまかったぞ」

ブラまんじゅうって……あんこの要素どこにもねえし、なんか卑猥だぞ。

寢室を出ると、ドアの外側の取っ手に袋が掛けられていた。中身は……大和製薬『特濃葛根湯』。

徹底的に素直じゃない。ホントあいつは……

苦笑しつつ、袋を取っ手に戻す。

昼寝でもするか。と屋上に上ると、先客がいた。

俺は小声で、あー、アー、と声をつくる。

「コラッ！ キンジ！」

「うげっ！ アリア！」

仰向けになっていたキンジがガバつと体を起こす。

「あ、あれ？ 勇士。今、アリアの声が……」

「バカキンジ。まだ気付かないの？」

俺がもう一度真似てやると、キンジは、はあとため息をついて横になる。

「相変わらず気持ち悪いなあ、その特技」

「気持ち悪いとは失敬な。立派な変声術だ」

「……………そうかよ」

「いいのか、白雪のボディガードさぼって」

「いいんだよ。どうせ魔剣なんていやしねえんだ」
ディランダル

「……………」

ま、いいや俺も昼寝しよ。キンジから少し離れたところに俺もゴロンと横になる。

風が気持ちいいや。ふあー

少しうとうとし始めると、何か騒がしい。と、グシャと自らの頭蓋が潰れる音が聞こえた。

「ぎゃあああああ」

絶叫しながらコンクリの床をゴロゴロと転がる俺。

こんなとんでもねえことをしやがる人物に心当たりは一人しかない。

「ありあゝ」

「あんたら下僕2人そろってサボってんじゃないわよ!」

そして、キンジの頭上には再び足が振りあげられ……真剣白羽
取りの練習かよ!

成功……ゴギヤ!……するはずねえか。

「もうっ。白羽取り、いつペンぐらいは成功させなさいよねっ!
遊びじゃないのよ!」

「……お前、パートナーなら相方のコンディションの事も少しは考
えてくれよ。たまには休ませろ。俺は病み上がりなんだ。どっかの
バカにベランダから、冷たくて、汚い、夜の東京湾に突き落とされ
たからなっ?」

案外、というか見てのとおりと言うか、キンジは根に持つタイプ
だ。かなり。

「そっ……それは悪かったわよ。あたしも、ちょっとやりすぎたか
もって思ってたから……」

アリアがバツが悪そうにプイツとそっぽを向いた。

「まあ、カゼのことはもういい。白雪がくれた『特濃葛根湯』の
おかげで直ったからな」
「え」

これには俺もえ？　だ。だってあれを買ってきたのはアリアのはずだ。そもそもキンジは『特濃葛根湯』の事なんて白雪に喋ったのか？

その証拠にアリアが驚きに目を見開いている。

「あ、あれは、あたし……」

そして、何事かゴニョゴニョと呟いている。

「何だよ。あれはマイナーな薬だけど俺には効くんだよ。確かお前にも、このあいだ話したろ。白雪がなんでか知ってて、それを買ってきてくれたんだ」

キンジがそう言うと、アリアは少し口を尖らせて、

「……………白雪がそう言ってたの？」

と、聞く。

「ん？　ああ」

「……………」

「……………」

これは。これは、たぶんキンジが勘違いしただけだろう。薬を買ってきてくれたのが白雪だと。で、白雪にそれでお礼を言ったら、白雪も流れて頷いちまったってところか。まあ、仕方ないといえばしかたないのだが…………

「ま、まあ治ったんならいいわ。あたしは貴族だし、そういうことは我慢する」

「？」

「貴族は自分の手柄を自慢しない。それは無様なことだから。たとえ横取りされてもね」

その台詞を言っている時点で、悔しくてしょうがないって感じだけ

どな。

「なんだよ。言いたいことあるならハッキリ言えよ。お前らしくもない」

「なによ！ いいじゃない！ 言いたくないことは言わないの！」

べー！ と、アリアはちっこいベロを出してきた。

「よかったわね白雪に看病してもらって！ 白雪、白雪、あんたにいいことをしてくれるのはいつも白雪！ もうあんた、白雪と結婚しちゃえば！」

「お、おい！ なに急にキレてんだよっ！」

「うるさい！ キレてらんかない！」

「キレてるだろ！」

「あんたこそ！」

やばいな。元来キレやすい。というか。あっという間にキレルアリアと、ここ最近ストレス溜まりまくりのキンジだ。

「おい、2人とも。ひとまず落ち着け」

ぎらぎらと睨み合っていた2人はちらつとこちら見、再び睨みあう。

「この際だから言わせてもらっけどな、パートナーの方針だから付き合ってたけど——真剣白羽取りの訓練なんて、もうやめだ！ あんなもん、達人技だろ！ そう易々とできるもんじゃねーんだよ！」

「だめよ！ 続けるわ！ ウワサでは魔剣は鋼をも斬る剣を持つてゐるって言われてる、だとしたらナイフやジュラルミンの大盾でも防衛できない！ 白羽取りの訓練は、今こそ重要な意味を持つのよ！」

いざ白雪が襲われた時、あんたを覚醒させて——」

「いざ、ってここ数日白雪に張り付いてたけど何も危ないことなんか無かっただろ！　こうなりやもついつペン言ってる！　敵なんて、魔剣なんて、いねえんだよ！」

だめだ。お互いに感情で喋っても意味がない。

「お前が一刻も早く母親——かなえさんを助けようと思ってるのは分かってる。でもお前はあのせいで平常心を失ってる！　魔剣^{ディランダル}っていう敵の名前を聞いた途端『いてほしい』って思った。それがいつのまにか『いる』になっちまったんだ！」

「——ちがうつ！」

そして、そして。キンジは、

「お前はズレてんだよっ！」

言ってしまった。その一言だけは言っではいけなかったかもしれない。

その言葉を聞いたアリアは傷ついたような表情でよろよろと後退すると、

「あんたも、そうなんだ。そういうこというんだ。みんなあたしのことを後先考えずの鉄砲娘。ホームズ家の欠陥品と呼ぶ。」

アリアは悲しそうな表情で続ける。

「でも、それでも。私にはわかるの！　私のカンでは敵はもうそこまで迫ってる！　ただ私は曾お爺さまみたいにそれを論理的に説明できない！　あんたなら、あんただけは分かってよ！」

「分かんねえよ！　いもしねえ敵の存在なんて信じられるか！　も

う一度言ってやる！ 敵なんていねえ！」

「このバカー！」

バラバラバラバララッ

「「のわっ」」

ダダダダッ

アリアが立ち去った後には、貯水タンクに『バカキンジ』と書いてある。

「ったく、どうすんだ。消えねえぞこれ」

「キンジ」

「勇士。いつものようにフォローしてくれねえのかよ」

「甘えたこと言ってんな。あいつの台詞聞かなかったのか？ あい

つは『あんただけは分かってよ』って言っただぞ」

「っ！」

「確かに悪いのはあいつの方だよ。あんな話信じろつてのが無理な話だ。でも、いっちゃいけねえこともあるし、それにあいつは言葉通り、キンジにだけは信じて欲しかったんだろうよ」

俺に言えるのはここまでだろうな。

銀氷 1

「お、帰ってたのか」

「！……………まあね。まあすぐ出るけど」

「行くあてはあんのか？」

「しばらくはレキの部屋に仮住まいさせてもらっわ」

俺が寮の部屋に戻ると、アリアが荷造りをしている途中だった。その表情は物憂いげだ。たぶん、さっきの発言を反省しているんだろう。こいつなりに。

「あんたは、どう思うの？ 魔剣のこと」
ディランダル

「……………俺はいると思うよ。そうしないと納得できない事件もいくつか起きてるし」
ケース

「……………そう」

少し。少しだけアリアの顔が晴れたような気がするが、根幹のところは変わっていない。

「まあ、キンジが付いていれば、魔剣が接触するまでは白雪は大丈夫だろ。お前の作戦も間違ってねえよ」
ディランダル

「！　そこまで気付いてるの？　はあ、バカキンジとは大違いだわ」
「それでも。それでも、お前のパートナーはキンジ、なんだろう？」
「…………………………」

答えない。ってことは凶星なんだろう。

アリアはそのまま、トランクを引っ張って、部屋を出て行った。

アドシアード当日。

俺はキンジと2人で講堂の入口のゲートでモギリをやっていた。
朝の混雑加減が薄れ、今の時間訪れる人はほとんどいない。

「なあ、キンジ」

「んだよ」

キンジに話しかけると、不機嫌そうな声が返ってくる。コイツ自身、今のアリアとの仲たがい状態が面白くないんだらう。無自覚だろうが。

「昨日、白雪を連れてどっかいったのか？」

「……………ああ、花火を見にちよっと、な」

「何かあったのか？ 目の下に隈が出来てるが」
「！ いやっ！ ……いや、何もねえよ」

キンジは一瞬顔を赤くしかけ、そのあとはもとの不機嫌面にもどる。

どうやら何かはあったみたいだな。それもあまり愉快じゃないことが。

キンジはそのままパイプ椅子に座って眠りこんでしまう。
はあく。いかん。俺も眠くなってきた。

俺も椅子の上でうとうとし始めると、端末が音をたてた。
慌ててポケットから取り出すと、画面には『CASE D7』の文字。

ケースD7とは、『アドシールド期間中、武偵校内で事件が発生した。ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎたててはならない。武偵高もアドシールドを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』——という状況を表す。

まじかよ。これは明らかに白雪。および魔剣がらみだ。ティランダル俺がどう行動するか悩んでいると、端末に再び着信。知らない番号だ。

ピッ

「もしもし」

「沖田勇士さんですね。狙撃科のレキです」

俺は多分、レキと話すのは初めてだ。でも今はそんなこともいってられない。

「おう。知ってる。場所だけ教えてくれ。何が起きてるかは分かっている」

「第九排水溝です」

「分かった。ありがとな！」

俺の欲しい情報だけを簡潔に伝えてくれた。レキ。噂だけは聞いていたが、おそろくかなり出来る奴だろう。俺が頼まなくてもキンジにも連絡してくれるだろう。

俺はとりあえず、キンジの肩を激しくゆすつて、駆け出す。

俺は頭の中で、素早く、武偵校内の内部地図を展開する。第九排水溝。そこから何者かが侵入したとするならば、その先にある建物ジャンクションは——地下倉庫！

武偵高の地下は、船のデッキのように、多層構造になっていて、地下二階は水面下にある。

俺はそこまで一気に駆け下り、エレベーターの方をちらっと見る。思った通り、パスワード認証の電子パネルの電源自体が落ちている。

俺は、変圧室に入り、その片隅に置いてある、ハシゴから固い保護ピンを抜く。

パスワード認証、カードキー、それと武偵手帳に登録されているコンタクトレス非接触ICで扉のロックを解除する。

ハシゴを下ろし、俺はポケットから登山用のロープをとりだし、金属部分をハシゴの一番上に取り付ける。そして、ロープを伝って5段とばしぐらいで降りる。一番下に着くとそこはボイラー室だった。

同じ要領で、地下3階、4階、5階と降りていく。そしてようやく7階に降り立つと、明らかに違う。

雰囲気が一気に冷たく感じる。目の前の非常扉をあければそこは確か火薬庫になっていたはずだ。おそらくそこにいる。ヤツが。

だが、火薬庫と言うことは銃が使えない。俺にとってはむしろ都合と言っべきか。それでも、刀と金属で火花なんか散ったら、自分もろともドカン、だな。

音を立てないようにそっと扉を開いていく。気配はできるかぎりばかす。完全に消すことは不可能だ。『消す』という意識より『ぼかす』『馴染ませる』という方が相手にばれにくいし、やりやすい。

少しづつ、奥へと進んでいくと、人の気配がいつそう濃くなってきた。大倉庫と呼ばれる弾薬などを保管している場所にどうやらいるようだ。

俺は物陰から様子を窺うように柵に背中を付ける。
そして、いた。

赤い光の下、俺から50mほど離れた壁際、山積みになった弾薬の脇に——巫女装束の白雪がいた。

相手の姿は暗闇の向こうだ。

姿は見えないが、このギラギラした感じ。明らかな殺意とまではいかないまでも戦闘の予兆を感じる。

俺は物陰をほんの少しづつそちらに向かって動く。

「どうして私を欲しがるの、^{ディランダル}魔剣。大した能力もない……私なんかを」

怯えきつた白雪の声。
ディランダル
魔剣――

「裏を、かこうとする者がいる。表が、裏の裏であることを知らずにな」

少し時代がかかった、男喋りの――女の声。

「和議を結ぶとして偽り、陰で、備える者がいる。だが闘争では、更にその裏をかく者が勝る。我が偉大なる始祖は、陰の裏――すなわち光を身に纏い、影を謀ったものだ」

「何の、話………？」

「敵は陰で、超能力^{ステルス}を練磨し始めた。我々はその裏で、より強力な超能力^{ステルス}を磨く――その大粒の原石――それも、欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは、自然なことよ。不思議がることはないのだ。白雪」

「欠陥品の、武偵………？ 誰の事」

白雪の声に、怒りの色が混じる。

「ホームズには少々手こずりそうだったが――あの娘を遠ざける役割を、私の計画通りに果たしてくれたのが遠山キンジだ。ヤツが欠陥品でなくて、何だというのだ？」

「キンちゃんは――キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「その通りだな、白雪」

「「！！」」

俺がその場に姿を出すと、白雪がこちらを振り向いた。暗闇の中からは息をのむ様子が伺える。

「……………勇士君」

「おう、白雪。悪いな、キンジじゃなくて」

「沖田勇士か。ここまでこの問題にはほとんど首を突っ込んでこなかったものを。それにしても、この私が全く気配を感じなかった」

「……………ったく、ここまで来ても姿を見せねえのかよ。ああ、お前に言いたいことが2つある」

白雪も魔剣も息をのんでいる。
ディランダル

「一つはキンジは決して役立たずじゃねえってことだ。あいつの勝負所での強さは俺以上だ。そして、もう一つ。俺の役割は……………キンジがくるまでの前座だ」

俺がそう言うと、暗闇の中から、ゆらりと人影が出てくる。

「どうせ、俺のことも調査済みなんだろう？」

「……………日本の剣豪、沖田総司の子孫らしいな」

「……………ああ。その通りだよ。オルレアンの聖女」

「！こちらの正体もばれているのか」

ジャンヌが遂に全容を現した。

「さあ。始めようぜ。日仏剣士対決をな！」

銀氷 2

「日仏剣士対決だと？ また大きな口を叩いたものだな」

雰囲気がゆらりと揺れ、暗闇からジャンヌ・ダルクの子孫が姿を見せた。

刃のような切れ長の眼は、サファイアの色。

2本の三つ編みをつむじの辺りに上げて結った髪は、氷のような銀色。

どこか古めかしい日本語とは裏腹に、ジャンヌ・ダルクはまさに西洋の歴史映画に出てきそうな——美しい白人だった。

俺はしばし息を吞んで彼女の立ち姿を見つめていた。

彼女の強い眼光と輝くような銀髪は暗闇の中で、幻惑的な雰囲気を出していた。

「驚いた」

「？」

「ジャンヌ・ダルクの子孫がどんな面してるかと思っただけ……こんなに美人だとは思わなかった」

「……」

俺がぼつりと呟くと、ジャンヌは俯いてしまった。

「美………と。そん………初………だ」

何事かぶつぶつと呟いている。

ま、いいか。俺は左腰の菊一文字則宗の鯉口を切った。

「さあ、始めようぜ。ジャンヌ・ダルク。こんな美人と手合わせな

んて久しぶりなんだよ。ちょっと楽しみだぜ」

「！ また！」

へ？ なんだ？ なんか空気おかしくない？

「生まれてこの方そんなことを言われたのは初めてだ。だが！ それでも私のやることは変わらない！」

ジャンヌが刀を抜く。いや、剣か。あれが魔剣^{ディランダル}！！

「勇士君！ 私も手伝う！」

白雪が助太刀を申し出てくれる。が、

「白雪。お前は最後の切り札だ。力を蓄えておけ。っていうか縛られた状態で何言ってるんだ。

言っただろう？ これは前座だ。主役のお前の出番はもうちょっと後だぜ」

白雪にそう答えて改めてジャンヌに向き直ると……………

キラキラとしたものがジャンヌの周囲を舞っている。心なしか、気温が少し下がった気がする。

思った通り、ジャンヌ・ダルクは超能力者^{ステルス}だ。それも氷を操る超能力——

「いいぜ。いつでも」

「……………参る！」

台詞を言った次の瞬間にはジャンヌはもう目の前に迫っていた。

バックスイングが大きい！ この一撃は当たるのが当然と思っている。

が。その一撃は空を切る。俺のすぐ左を剣が掠めていく。

ジャンヌが驚愕に目を見開く。俺は咄嗟にバックステップで距離を取った。

「何故……？」

「お前が勝負が始まる前に何かを仕掛けるのは分かっていた。小剣を俺の足元にさして、俺の足をとめるつもりであることもな」

「だが……避けた様子は――」

「避けてねえよ。俺は刀で弾いただけだ。日本の刀鍛冶の名匠、『正宗』。お前も名前は知ってんだろ。あいつの打つ刀は超能力を無効化する力があるんだよ」

「そんな……私の超能力が……」

「それでも、咄嗟に弾けたのは左足だけだった」

そのおかげで、左肩を掠めやがった。くそっ、左肩が軽く凍りついてやがんな。痛ってえ……

「さあ、こっからだぜ。本当の勝負はよ」

「……いいだろう。武偵は超偵に勝てないことを証明してやろう」

ガッ

床を蹴ってジャンヌに肉薄する。ジャンヌも同時に迫ってきた。

キイイインッ

魔剣と菊一文字則宗が交差すると、澄んだ音が響き渡る。魔剣が

冷え切っているからだろっ。

そのまま、鐔迫り合いに持ち込むと、剣との接触点から、すさまじい冷気が流れ込んでくる。その割に、もうダイヤモンドダストはない。力を一点に集中させている。自分の能力を完璧にコントロール出来ている証だ。

言い訳にはしたくないが、さっきの左肩への衝撃で、左肩は痺れて、全く動かない。いくらジャンヌが女性だからといっても、左肩が使えないのでは、このままジリ貧だ。

たまらずに俺はバックロールで距離をとった。

やはり、ジャンヌは強い。お得意の奇策を抜いたとしても、純粋に剣士として、強い。

「どうした？ もう来ないのか？」

俺の焦りを感じ取ったのだろうか？ ジャンヌが微笑みをたたえて剣を構えている。

「笑った顔も可愛いじゃないの。……………つたく。こういうのは俺のキャラじゃないんだけどな。やるしかねえか」

小声で呟いたつもりだったが、ジャンヌには聞こえていたようだ。その証拠にふいっとそっぽ向いてるしな。

よし。俺は再び、足に力を込め、駆ける。刀の切っ先を、ジャンヌの胸に合わせる。当然その一撃はよけられるが、俺は構わず、次撃をくりだす。避けられる。それでも俺は攻撃をやめない。

「むうっ！」

俺の怒涛の突きにジャンヌが後退する。一撃の重さや、威力、コ

ントロールを無視した、手数を優先した攻撃。

「ふっ、諦めが悪いな。そんながむしやらの攻撃など……」

が、そんな攻撃は次第に慣れられてきた。いとも簡単に裁かれていく。

「もう詰んだんじゃないか？ いい加減諦めたらどうだ。沖田の子孫とやら」

「諦める？ ふざけんな。お前はすでに俺の術中にハマってんだぜ？」

「何をバカなことを……！」

ジャンヌの台詞の途中で暗闇から二つの影が別々の場所から飛び出してくる。

「俺は一人じゃないんだぜ！」

「よく持たせたわ！ 勇士！」

「サンキュな！ 非常階段のロープは助かったぜ！」

アリアとキンジが暗闇から飛び出してきた。

アリアは二刀流。キンジはバタフライナイフを握っている。

「くっ！ 最後の怒涛の突きは、この二人の気配を私に感じさせていたためのものか！」

「ああ、その通りだ！」

「勇を使え蛮を使え、賢を使え愚を使え——って言うでしょ。バカキンジモードのバカキンジには、バカキンジなりの利用法があるのよ」

「ちっ！」

ジャンヌが駆け出していく。

「白雪は」

「ケガはしてなかった。でも縛られてる。助けるの、あんたも手伝いなさい」

そんな2人の会話を聞いた俺は途端に体から力が抜けていくような感じがした。

「……………つたく。仲直りしたのかよ。ま、俺の努力もこれで報われるってもんだ。アリア、キンジ。後は任せた。俺は少し疲れたぜ」
「何言ってるの。あんたもアタシの奴隷でしょ。まだまだ働いてもらうわよ」

犬歯を丸出しにして、ニカツと笑うアリアに俺は苦笑を返すしかない。

「……………はあ。人遣いが荒いね。うちの主君は。まあいいさ」

「アリア。敵の——気配がしなくなったな。逃げたのか」

「敵が複数いる場合は、まず距離を置いて、遠くからうまく敵の戦力を分断して——一人ずつ、一対一で片付けようとする。これはディランダル魔剣の戦術パターンなのよ」

「それに、ジャンヌは俺たちに顔を見せた。このまま逃げるのは考

えづらい。ここで決着をつけたがるだろう」

倉庫の壁際にいた白雪は、立ったまま鎖で縛られている。
腕の鎖をはずすと、

「キンちゃん大丈夫！？ ケガしなかった！？」

キンジの両腕をつかんで、心配そうに顔を覗き込む。

白雪の胸と、足首にひとつずつ、合計三つのドラム状が、錠前付きで近くの鉄パイプに繋がれている。

「俺は大丈夫だ。お前こそ……」

「勇士。さっそく出番ね。鍵開けは多分あんたが一番うまいわ。どれぐらいかかる？」

「一個5〜10分。3つ外すのに、20分ちよっとつてところか」

俺が鍵を持ちながら答える。

「キンちゃん……ごめんなさい……私、ここにこの服で、誰にも内緒で来ないと……学園島を爆破して、キンちゃんの事も殺すって言われて……」

「いつから言われてたんだ」

「昨日……キンちゃんが線香花火を買いにいつてくれた時に、脅迫メールが来て……私、キンちゃんが傷つけられるのが怖くて……従うしか、なくて……ふえ……え……っ」

「いいから、今は。泣くな」

キンジが悔しそうな表情で歯ぎしりする。

「キンジ。悔しがるのは後だ」

「分かってる」

「勇士君も、アリアもごめんね。勇士君。私のために、怪我して……左肩みせて」

俺が左肩を差し出すと、白雪の右手が左肩にふれ、そこが仄かに温かくなる。

「おっ、ラクになった。サンキュな、白雪」

「アリアも……ごめんね。私、アリアにあんなヒドイことばかりしてたのに……助けにきてくれたんだね……」

白雪の言葉に、アリアは照れながら否定している。

その時——「ごぼっ、ごぼぼぼっ」と水がわきあがるような音が聞こえてきた。
と、バシャアア

水が流れ込んできた。

「「「……………」」」

海水だ。これ。

「おいおい。マズくないか……………」？」

銀氷 3（前書き）

大っつっつっつ変、申し訳ありませんでしたあ！！！！！！（土下座）

いいい、言い訳をさせてください。

ぱ、パソコンがですね。インターネット回線が繋がらなくなりました……

戻った後も、なんかかんやと忙しくて、てがつけれませんでした。た。

これからは、ガンバッテ週一のペースに戻すので、どうか、見はなさないでくださいまし。

銀氷 3

「なあ、キンジ……………」

「ああ……………」

「「アリア、ばれてるぞ」」

「！！」

「……………ばれてるって何？」

白雪の問いに、アリアは、かああ。

赤面しつつ、『言っちゃダメ』みたいな視線を送ってくるが……………
今は状況が状況だ。

「泳げないんだよ、アリアは」

キンジがそう言う……………

「そ、そんなことない！ う、浮き輪さえあれば……………」

「そんな便利なもんはねえよ」

俺はアリアが不安そうに水を見つめているのを見ると、場違いにも笑いがこみあげてきた。

「ぷっ」

「！ あ、アンタ……………い、今、笑ったわね！ か、風穴——」

「わ————！ バカバカ！ 発砲すんな！」

あ、危ねえ。大爆発で死ぬところだった。

「……とりあえず、アリア、勇士は先に上にあがれ。」

「だ……ダメよ！ あんたたちを見捨てて逃げるなんてできない！」

「違う、これは退避じゃなくて攻撃なんだ！ 上に行って魔剣^{デュランダル}から鍵を奪ってきてくれ——あいつをぶちのめせるのは、お前らだけだ！」

力強くそう言いきったキンジに——

キンジ——漢だ。アンタ、漢だよ。

でも、問題が一つ。

「アリア、悪い。俺はさっきので、左肩が完全にいつちまったっぽい。白雪の術で痛みはねえけど、動かねえ。これじゃあ、足手まといは目に見えてる。俺はここで、鍵開けに挑戦してみる」

「……………分かったわ。でも、危なくなったらすぐあたしを呼ぶのよ！」
「ああ」

俺はそう答えつつ、呼ぶことはできないことを悟った。

ガチャンッ
鍵の一つが外れた。

水の勢いは増すばかりで、このペースなら、リミットは、あと5分ってところか……
水かさはすでに俺の肩辺りまで来ている。
白雪はもうすでに首のあたりまで来てるか。

「勇士……………」
「……………ああ」

キンジも俺も分かってる。一つの鍵をはずすのに、十分かった。どう考えても、あと二つの鍵を五分で外すのは無理だ。

「なあ、勇士……………お前は言わないんだな」

「え？」

「中学の頃の奴はさ、みんな俺の秘密を知ってるやつは……………ピンチになると、俺に早くなれよ！ といっつも言ってたから」

「……………俺は、お前が自分の力との向き合い方を悩んでいるのは知ってる。強引にお前をヒステリアモードにしても、何の解決にもならねえし、そんなもんは仲間じゃねえ」

「そうか……………」

「キンちゃん、勇士君……もう行つて。私のために危険な目に遭うのはやめて……」

俺が二つ目の鍵をいじつてると、白雪が弱弱い声でそう言った。俺とキンジが白雪の顔を見ると、白雪は——笑っていた。つたく、命の危険にさらされているこんなときまで……ホント、いい子だな。

「バカ言うなっ」

「星伽の巫女は、守護り巫女。誰かのために身も心も捧げ、投げ打つのが定め。キンちゃんはもう避難して。私の事は、もう、いいから……」

「お前を置いて行けるか！」

叫んだキンジに、白雪は答えようとして——

とうとう口まで来た海水に顔を一瞬しかめ、ぷは、と上を向いて息を継いだ。

「いいの、私は——私が死んでも、きっと誰も泣かない。私は先生とかみんなにもてはやされてたかもしれないけど、私のことを本当に好きな人なんて……誰も、いない——ぷはっ、私じゃ……なくて、星伽の巫女の超能力が、持ち上げられてただけ……あぶっ……」

「そんなこと言っな——」

顔を上に向けて息をした白雪に、俺は思わず叫んでいた。

「そんなことない。少なくとも、俺は……俺は白雪のこと、大事な仲間だと思ってる！ 絶対に死なせたくねえ！ 命に代えても守ってやりてえ！ なあ、白雪。俺たちはこんなところじゃ死なねえ。お前言ってたじゃねえか。星伽から逃げられないって。——来週の日曜さ、キンジとアリアとみんなで、遊びに行こうぜ。カラオケ、ボウリング。色んなところに行こう。」

キンジとアリアの喧嘩を俺一人で収めんのは大変なんだ。手伝ってくれ。だから、俺には、俺達には、お前が必要だ！ 白雪！」

がぼぼっ

遂に白雪が上を向いてないと呼吸もままならないところまで水があがつてきた。

俺もそろそろきつい。

「キンジ！」

「！」

「俺は、おまえに無理してヒステリアモードになることはねえ。と言ったが……それと、白雪の想いに応えてやるかは、別問題なんだぜ？」

「！」

キンジは驚いたような表情で眼を見開いている。

うわ、やっべ。足が浮いてきた。

「白雪、一つアドバイスだ」

「？」

「信じ抜け。お前のヒーローを、最後まで信じ抜いてやれ……」

そのとき、白雪は泣き笑いのような顔をして俺を見た。と同時に俺の手元で、ガギンツと二つ目の鍵が外れ……………俺は意識を手放した。

キンジ side

「勇士っ！」

勇士がぶくぶくと沈んでいく。

勇士ほどの一流の武偵なら、軽く一分は呼吸をとめられるだろう。それがものの十秒で力尽きた。

デュランダル魔剣との戦闘で疲労困憊の上、集中して、鍵をはずそうとしてたんだ。当然かもしれない。

「し…………白雪！ 今にアリアが鍵を持ってくる！ 1秒でも長く持ちこたえろ！ 息を大きく吸え！ 依頼人はボディーガードの言うことに従え！ 鎖だつて俺がなんとか——」

「ボディーガードの、依頼は——！ もう取り消します！ キンちゃん——！ 早く勇士君を連れて逃げて——！ 生き、て…………！」

「白雪…………！ ああ、チクショウ…………俺のせいで…………こんなことに…………！」

「キン…………ちゃんは——悪く、ない——！」

その言葉を最後に。

白雪は——

ぎゅっ、とその目を閉じたまま、水面下に沈んでしまった。

「白雪iiiiiiiiッ!!」

水の中で、白雪の黒髪が——力なく、ゆらゆら揺れている。

もう覚悟を決めたのか、白雪は俺から顔を逸らすようにつつむいてしまった。

「白雪……!!」

死ぬ、つもりなのか。

俺が逃げやすいように。

っざけんな……!!

俺は、友達1人、幼馴染1人助けられねえのかよ!

……くそっ!

(強引にお前をヒステリアモードにしても何の解決にもならねえし)

ふいに、勇士の言葉が脳裏に蘇ってきた。

(白雪の想いに応えてやるかどうかは、別問題なんだぜ?)

ああ、そうか。そういうことが、勇士。

俺は、ヒステリアモードを嫌悪するあまり、大事なことを見失っていた。

勇士は言った。俺は命に代えても白雪を助けたいと。

じゃあ、お前はどんなんだ遠山キンジ。

星伽白雪を助けたいのか？

答えは——決まってる。

俺は、兄さんが死んでから初めて、自分の意思でこの力を使う。
白雪。お前は俺が絶対助ける！！

俺は限界ギリギリまで息を吸うと、

ザブンっ。

潜った。

半ば脱力していた白雪の両肩をつかむと、白雪はその大きなお目
々をさらに大きく見開いて、首を左右に振った。

そして水中で、ぱちぱち、とマバタキ信号を送ってくる。

死なないで そんな償い方 しないで

俺が心中するつもりだと思っただけらしい。

ざっけんな。

死ぬつもりなんだ、さらさらねえ。

お前の願い事

『キスして』——って。

こんな形で悪いけどな。

言うこと——聞いてやるよ！

吸え

それを伝えてすぐ——

俺は、白雪を抱きしめ。

「——！」

口と口を、合わせた。

白雪の唇は――

比較するなんて本当に罪なことだが、アリアのそれより――柔らかくて。

すつつ、と吸いこまれた息と少しだけ入れ違った白雪の息は、甘い桃のような香りで。

……ああ。

この感じ。

唇を起点に、昂ぶった血液が身体中を巡り――芯に、集まっていく。

気付いた時には、なっていた。

ヒステリアモードに。

ぷくぷく……ぷく。

と、白雪が、唇の端から息を吐く。

息ができている。

俺は唇を合わせたまま、さらにもう一呼吸、二呼吸させてから――口を離し。

白雪を縛っている鎖の鍵に手を伸ばした。

そのまま、勇士ですら五分かった、残りの一つのカギを、わずか十秒であけると、

俺は白雪を抱いたまま、上昇する。

――ぷはっ！

揃って水面に顔を出す。

よかった、間に合った。

「キンちゃん！」

白雪が抱きついてくる。

「白雪、勇士を連れて脱出するぞ！」

上にながって、勇士を床に横たえらせる。
「くそっ！」

俺は両手を重ねて胸の上に置いて、体重をかける。

心臓マッサージ。

「くそっ！ 勇士。戻ってこい！ 俺はやつと自分の力と向き合えそうなんだ！ お前がそこにいなくちゃ意味がねえ！ 頼む戻ってこい！」

ふと、俺は気付く。心臓マッサージの次は人工呼吸か……今は一刻を争う。

俺は勇士の口元に顔を近づけていくと……

「ぶあふあっ」

俺の顔に盛大に水がぶつかかった

「ゲホゲホッ」

「勇士……」

「勇士君……」

「まったく、キンジにキスされる夢見ちまった。最悪……」

こ、こいつは……

「よう、キンジ」

「勇士。………ありがとう」

「いい顔してるぜ、お前」

俺は心から親友の生還を喜んだ。

銀氷 4

目が覚めると目の前には顔を青ざめた白雪と、顔がビッチョビッチョのキンジ。

どうやら生きてるみてえだな。
しぶといねえ、俺も。

「ありがとう」

唐突にキンジが俺に向かって、礼をいつてきた。

心なしか、その顔は憑き物が堕ちたような、さっぱりした顔をしている。気がする。

まあ、ヒステリアモードだから、よく分かんねえけど。

「勇士君……………」

「お。白雪。無事みてえだな。よかったよかった」

白雪が泣きそうな顔で俺を見てくる。

「ごめんね……………」

「違えだろ？」

「え？」

「いったら？俺はお前を助けたって。だから？」

「……………ありがとう」

「うん」

俺は白雪に笑ってやると、白雪もようやく笑みがこぼれた。

っと。やっべ。

「勇士!?!」

俺は立ち上がろうとして、右足に思うように力が入らずふらついでしまう。

「大丈夫だ。問題ない。けど……少し休ませてくれ」

「白雪。依頼なんて関係ない。俺は、白雪を守る。白雪だから、守りたいんだ——どうしても。俺のこの熱い、熱い、想いを……白雪に受け入れてほしい」

キンジがクサすぎる台詞を真顔で言っていた。
白雪は瞳をうるうるさせて聞いているし……

「で、でもキンちゃん。相手は魔法使いだよ。私も戦うつ」
「勇敢な子だ」

キンジはそれに小さくうなずくと

「そんな事はないと願いたいけど、どうしようもなくなったら手を貸してほしい。俺とアリアが前衛。白雪は――後衛だ。伏兵を頼む。勇士はすまねえが、全体の指揮をとってもらえるか。」
「了解」

上階へ続く隔壁を開くと、ガギンと三重の扉を開けると、ずうんと倉庫全体に鈍い衝撃が走る。

「チッ！」

水の勢いが、急激に増してくる。

水位がみるみるあがり、

「きゃあっ――！」

地下6階のフロアに上がった白雪が水流に足を取られて、キュッキュッ！と音を上げながらリノリウムの床を滑って押し流されていく。

「白雪！ 補助刀剣を出しておくんだ！」
「はっ……はい！」

「キンジ……」

「大丈夫。白雪なら大丈夫だ」

「ああ、そうだな」

「歩けるか？」

「もちろん。……ングッ」

立ち上がろうとすると、やはり右足に鋭い痛みが走る。

「大丈夫……」

「はぁ……何が大丈夫なんだよ。ほれ」

「すまん」

キンジに肩を貸してもらって、ゆっくりと歩き出す。

「キンジ、勇士」

コンピューター室の奥でアリアと鉢合わせした。
さつき俺たちの声を聞いて引き返してきたらしい。

「勇士……怪我……」

「心配すんな。たぶん捻挫だ」

アリアには心配させないようそう言ったが、正直焼けるように痛い。こいつは骨いつてるかも……

「でも、生きててくれて、よかった……」

アリアはそう言って俺たちのそばまでくると、

「あんたたちは先に上に上がりなさい。どっちみち勇士は戦えないでしょ」

「……まあな」

「俺は戦う」

「キンジ。あたしは『戦わなくていい』って言ったじゃない」

小声でそんな事を言う。

「可愛いアリアを置いて逃げられるほど、俺は理性的なタイプじゃないんでね」

「な、なによそれっ」

「アリアが俺に会いたがつてるだろうって思ったら——体が止まらなくなっただんだよ」

「な、ななに言ってるんのこんな時にっ」

「お前らな……」

目の前でイチャつかれる俺の気持ちにもなれ。そう思った時、

「そいつから離れる!!」

俺が叫んだ瞬間、白雪が目にもとまらぬ速さでアリアの側面に回り込む。

俺とキンジは同時に拳銃を抜く。

……が。撃つことはできない。

アリアの体を盾にされてしまった。

すると、ジャンヌが首筋にふっと息をかける。

「ヴうわああああ」

アリアの叫び声。マズイ。あいつの息はものを凍結させる。

「アリア、よく聞け!」

「そいつは白雪じゃない!!」

俺とキンジが同時に叫ぶ。

「——只の人間ごときが」

もはや白雪のものではない声

「超能力者に抗おうとはな。愚かしいものよ」

くそっ! 俺もついて行っていれば、気配で一発で気付いただろう。俺は自分の甘さが齒がゆくてしかたがない。

「私に続け、アリア。イ・ウーに來ないか? そこの沖田総司の子孫も歓迎するぞ?」
フオー・ミー

「ざっけんな。誰が犯罪組織に入るかよ」

「おっと。動くなよ。動くときアリアを殺すぞ。まあ、どうやら動けるような状況ではないようだがな」

「キン、ジ……撃ちなさい」

その時、アリアが苦しそうな声でそう言った。
お前、どこを撃てつつうんだよ！

「喋ったな？　ならこの悪い口はいらないな」

ジャンヌがアリアの口許に向かって息を吐こうとする。

「やめろッ！！」

俺とキングの声がシンクロする。
でも、叫んだところで動けない！

「アリア！」

その時、ジャンヌの手に握られている白雪の刀に鎖が巻き付いた。
そのまま、刀は鎖に引っ張られ、ジャンヌの手元から離れる。

その一瞬のすきについて、キングがアリアを救出した。

「白雪！」

今度は本物の白雪である。

ちようど、ジャンヌの上にあるコンピュータの上に、刀をキャッチした白雪が立っていた。

そのまま白雪はジャンヌに肉薄し、刀を振り下ろす。

「チッ！ 白雪、貴様が命を捨ててまでアリアを助けるとはな」

と、白雪に変装するために着ていた袴のすそから、筒のようなものを落とした。

シューウウウウウ……！ 筒から白い煙のようなものがあがる。

まさか、毒ガス！！

いや、ジャンヌもこの場において、俺たちを逃がすわけにはいかない以上それはない。

ということとは……煙幕。

シャアアアアアア

煙を感知したスプリンクラーが水をまきはじめる。

白雪はじりじりと後退し、俺たちのそばまで戻ってきた。

「ごめんね、キンちゃん。いま、やつつけられると思ったんだけど、逃がしちゃったよ」

「上出来だ。白雪」

「や、やられたわ。まさか白雪が二人とはね」

アリアは手をグッパー、グッパー　させている。どう見ても握力が弱っている。

「白雪」

「うん」

俺が白雪に振ると、白雪はすぐ分かったらしく、アリアの右手をつかんで、両手でにぎる。

「ごめんね。アリア。しみるかも」

白雪が呪文のようなものをつぶやくと、

「くっ——っっっ」

アリアが苦悶の表情を浮かべて、軽く悲鳴をあげた。

「アリア」

煙の向こうから、声が聞こえる。

スプリンクラーの水が空中で雪の結晶のようになり、きれいに舞っている。

ダイヤモンドダスト、という現象だ。

「キンちゃん……アリアを守ってあげて。アリアはしばらく戦えない」

「魔女の氷は、毒のようなもの。それをキレイにできるのは修道女^{シスター}か——巫女だけ。でもこの氷はG6からG8ぐらいの強い氷。私の力で治癒しても、もとに戻るまで……5分はかかると思う。だからその間守ってあげて。敵は、私が1人で倒すよ」

「——何を言っただ白雪。お前を1人で戦わせるなんて、できない」

キンジはジャンヌと白雪の間のような位置に立っている。

「キンちゃん……そう言ってくれるの、うれしいよ。でも今だけ、ここは超偵の私に任せて」

「大層な覚悟だな」

煙が晴れ、ジャンヌが現れた。

「白雪」

尚もキンジが渋るような顔をする。

「まったくよ。」

俺は強引に右足に力を入れ、
鞘を杖代わりにして、
ゆっくりと立ち上がった。

「俺も混ぜろよ」

銀氷 5

足はがくがく。
体はぶるぶる。

則宗を杖代わりにしてよろよろと俺は立ち上がった。
立ち上がることが出来た。

「俺も混ぜろ……だど？ ははっ！ どの口がそのようなことを
言える！ 今にも死にそうな状態で！」

「勇士君。これは私の戦いだよ。ここは私に任せて」

「バツカ野郎。お前が覚悟を見せるって言ってんだ。俺だけへばっ
てるわけにはいかねえだろ」

俺は脂汗を浮かべた表情で笑って見せる。

白雪は諦めたような呆れたような表情でジャンヌの方に近づいて
行く。

「ジャンヌ」

「もう……やめよう。私は誰も傷つけないの」

ハッキリと伝えた白雪に、フン、という笑い声が煙の向こうから

聞こえてくる。

「笑わせるな。原石に過ぎぬお前が、イ・ウーで研磨された私を傷つけることはできん」

「私はG17の超能力者なんだよ」

今度は笑い声が返ってこない。どうやら今の言葉はかなりのインパクトがあったようだ。

「仮にそれが真実であつたとしても、お前は星伽を裏切れない。それがどういうことを意味するか、分かっているならな」

「ジャンヌ——策士、策に溺れたね」

俺は次の瞬間、ジャンヌに斬りかかっていた。

ガギンツ！！

「なっ！ 貴様、どうして動ける！」

「ハアハア、ドーパミンって知ってるか？」

俺は体から強制的にドーパミンを出して、痛みを感じないようにしていた。

「バカな！ そんなことして無事で済むとでも……」

「ああ、覚悟はしてるさ。それに、俺は一発、手前を殴りたかっただけだ！」

バキィ

俺の右拳がジャンヌの右頬にえぐりこむ。

そして、この状態は諸刃の剣……………

「後は任せたぞ……………みんな」

俺は今度こそ、意識を失った。

目を覚ますと、見知らぬ天井だった。
なんてことはなく、そこは衛生科のベッドの上だった。

「イテッ……………」

寝返りを打っただけで体の節々が痛い。
どうやら生きているようだ。

「あ、目覚めた」

衛生科の先生らしき人が近づいてきた。

その後、体の検査をしたり、色々聞かれたりした。
驚いたことに俺は3日3晩眠り続けたそうだ。

その甲斐あってか、松葉づえをつきながらだが、明日には退院できそうだ。

先生と俺は2人そろって、俺の回復力に呆然とした。

その日の午後、アリアとキンジと白雪が見舞いに来て、事件のその後の顛末を教えてくれた。

ジャンヌは無事逮捕できたそうだ。

白雪は俺が足を折ったことを知るや否や、泣きそうな顔になって土下座しそうになったので、慌てて俺が止めた。

まあ、無事これにて解決というわけだ。

次の日。

アリアにファミレスに呼び出された俺は、松葉づえをつきつつ、自動扉をくぐった。

「よう、勇士」

「勇士君、こんにちは」

「遅いわよ！　勇士」

それぞれの歓迎の言葉を受け取りながら「松葉づえなんだから無茶言つなよ」とアリアに毒づきつつ、席に着いた。

「で、何だよ？」

「まあ、事件解決の祝勝会ってやつだ。」

「そつなんだけどね、まず私から話があるのよ」

……話？

「白雪。あんたも、あたしのドレイになりなさい！」

こうして、白雪が仲間になりました。

第二幕 完

月下の双剣双銃（前書き）

若干、R15です

月下の双剣双銃

さてさて、俺とキンジの部屋にアリアと白雪が入り浸るようになって、すっかり俺の居場所がなくなってしまった。

あの2人、ことあるごとにぶつかって、鉄砲やら刀やらマシンガンやら……etcを持ち出して殺り合うから、最初の内は俺も止めようとしていたんだが……

諦めた。体力の無駄だ。どう考えても。

そんなわけで、俺とキンジは2人仲良く防弾倉庫で丸くなる日々を送っていた。

すでに安息の場所はある部屋にはない。

そんなある日。

P r r r r r !

携帯の着信。学校が終わって屋上で昼寝をしていると、見知らぬ番号から電話がかかってきた。

無視してもいいんだが……

「……………はい」

「遅い！ あたしの電話は0コールで出なさいよね！」

我らが主君様であつた。

ていうか、その要求は無茶だ。

「……………何の用だ」

「すぐ来なさい。女子寮1011号室！」

「……………いやだ」

「あたしが来るって言ったら来る！ 来なかったら風穴！」

ガチャン！ プープープー……………

ああ無情……………

「遅い！ バカ勇士！」

1011号室のドアを開けて待っていたのはアリアの罵倒だった。

「はいはい、悪かったよ……」

俺はアリアに促されるままに奥の部屋へと歩を進める。

「勇士、アンタに頼みがあんのよ」

「……………何だ？」

バツ

俺がそう答えた瞬間、ベッドに腰掛けていた俺にアリアがダイブしてきた。

ひょい

ドフ

当然のごとく俺は避けてアリアは顔面からベッドに突っ込む。

「久しぶりのご挨拶がそれはひどいんじゃないか？ 理子」

「んにゅ〜、ユー君のいけず〜」

ベッドに顔面を突っ伏したまま、くぐもった声で理子の声でアリ

アが答える。

「帰ってたのか」

「まあね。無事あっちの方も終わったしい」

するとアリアは自慢のピンク髪をはずした。

ふわっとひろがったのは、ウェーブのかかった金髪。

マスクをひきはがすと、そこにあったのはまぎれもない理子の姿であつた。

「どうして分かったの？ 変装は完ぺきだったはずなのにな」

「変装はな。問題はそれ以外だろ。玄関の靴。アリアがあんなにきれいに脱ぎそろえるわけないじゃん」

俺も電話の時点では、気付かなかった。この部屋に来て、靴を見た瞬間から、色々おかしいことに気付いたんだけだな。

「それに、いくらさらしを巻いても限界があるだろ」

「うわあ。ユー君そんな目でアリアの事を……」

「んなわけあるか」

アリアの胸は確かに小さいからな。理子がさらしを巻いても、アリアの素の方が小さい。

「うん。まだまだユー君の眼は欺けないかあ」

「そういうこと。100年早い」

俺が少し得意げになって言うと、理子は少し悔しそうな顔をしたあと、ふっと笑って――

俺の右腕をつかみ、引き寄せようとした。

グイと言う音が手首からして、俺は普通にその手を引き離そうと

――！！

「っ痛」

俺は右肩に走る衝撃とともに、体の力を緩めてしまった。

クルッ
パタン

「へっへっへっ、ユー君、捕っ獲っ」

ものの見事に理子にマウントポジションをとられてしまった。

そして理子はそのまま仰向けの俺にのしかかってくる。

豊満な胸がつぶれて……か、感触が……

「ふふっ。ユー君のエッチ。どこ見てるの」

「べ、別にどこも……」

視線を下にずらしてしまうのは、健全な青少年の悲しい性という
ものだろう。

「うりうり」

「や、やめっ！」

理子はそのまま自分の体を俺の体にすりつけるようにしてくる！

「へ、変態か！ お前は！」

「えゝ。そんなこといいながら喜んでるユー君にはいわれたくないなあゝ」

何とかこの状況から逃げ出したいが痛めている右肩と左足をかちりホールドされてて、多分動かすと痛くする気だ、こいつは……

……

ふいにピタッと、理子の動きが止んだ。

俺はホッと安心半分残念半分ぐらいの気持ちでいたところに、

「……」

理子は俺のワイシャツのボタンに手をかけ、ひとつひとつ外しかかっていた。

「おまつ、ちよつ、何してっ！」

全く言葉になってない、俺の反抗を無視して、次々ボタンが外されていく。

「ほえゝ。やっぱりたくましい体……」

理子はそんなことを言いつつ、俺の胸板に頬ずりをしてくる。背中にゾクゾクゾクツとした感覚が走る。

「ねえ、勇士。ジャンヌと戦ったんでしょ」
いつのまにやら呼び方も変わっている。

「ああ、まあな」

「それで、右肩と左足を怪我したんだ」

理子が少し悲しげな声でそんなことを言ってくる。

「ああ。でも、キンジは少しはHSSと向き合えたみたいだし、白雪も何か壁を乗り越えた見たいたったから、別にいいだろ、これくらい」

正直、今すぐ俺の上からどいて欲しいのだが……

「やっぱり優しいね……勇士は」

「え？ 何？」

今理子何か言ったような気がするのだが……

「じゃあ、怪我が早く治るように私がおまじないをかけてあげる」

「おまじない？」

おまじないってあれか。イタイのイタイの飛んでいけっっていう例の……

それは結構恥ずかしいけど……まあ、それで理子がどいてくれるなら……

「じゃあ、よろしく頼む」

「うん、へへっ」

理子は笑いながら俺の右肩に顔を寄せていき、

ペロッ

舐めやがった。

「ひぁ！」

こ、こいつは……

「お、お前は一体何を……」

ペロッ

「ふう！」

「や、やめ」

チュパ

「ひゃ！」

不覚にも変な声が出る。

「傷は舐めると治りが早いんですよ。だから……」

「骨折が舐めて治る訳……んぐう！」

そこからは、理子は俺の右肩を俺の反応を楽しむように舐め続ける。

「んふっ、気持ちいい？ 勇士」

気がつけば俺の目の前にはマロンウェーブヘアがひろがり、甘い

どどっしょっしょ。マジで……ピンチだ！

月下の双剣双銃 2

やばいやばいやばい……………！！！！

この難局を如何にして切り抜けたもうか……………！！！！

そうこうしてる間にもベルトが外れてチャックが……………
「……………たく、いいタイミングなこと……………」

ガッシャアアアアアン！！

ベッド際の窓ガラスがすさまじい音とともに玉砕した。
そして、そこからは……………

「私のドレイを盗むな！」

ピンクのツインテールのご主人さまと、目を回した、親友が部屋
になだれ込んできた。

どんっ

理子がすぐさまベッドから飛び降り、懷から弐丁拳銃を出して構
える。

俺も、すばやく後転して膝立ちの状態で構える。

痛えええええええええしっ！

ババババババババツ！！

続けざまにアリアの式丁拳銃と、理子の式丁拳銃が火を吹く。
あたりは、白煙で一瞬視界が真っ白になり、それが晴れると、と
りあえずはお互いに銃口は下げたようだった。

「あああ。いいトコだったのに」

「勇士はあたしのドレイよ！ アンタなんか盗ませやしないわ！」

「え、でもでも。アリアはさあ。キーくんのが好きなん
でしょ？ それでユー君のことまでとろうつてのは、ちよつと男
好きがすぎるんじゃない？」

「なつつつ！」

ぼっ ぼぼぼっ！

一瞬でアリアの顔が真っ赤になる。
瞬間赤面癖ってすげえなあ。

「だ、だれがこんなやつら！ 勇士も勇士よ！ なんであんな……
……」

「……右腕と左足が動かないんだよ……」

声がいっきし言い訳がましくなってしまったが、それも事実な
ので嘘は言っていない。

「むむむ……」

そんな俺の台詞に思うところもあったのか、アリアはうなつてし
まう。

「ねえねえ、キーくん。アリアとはどこまで言ったの？ A / B？

それともC？」

オジさんかお前は。と思わず突っ込んでしまいたくなるほどひどイ表現だ。

ま、理子の眼はキラキラ輝いてるけどね。これ以上ないってくらい。

「ば、バカか！！俺とアリアがそんな関係なわけないだろ！」

キンジが必死に否定する。

「あ、でも確かに。キーくんも、お胸が鉄板のようなアリアとは付き合えないかな？」

「~~~~~！！風穴つ、風穴開けてやるっ！」

再びアリアが臨戦態勢に入ろうとしたところで

「でも、私とユー君の邪魔をした償いはしてもらっよ」

理子が足元に大きな懐中時計を投げ付けた。

俺はその瞬間に窓の外へと飛び出して、ワイヤーにつかまる。

「さっすがゝ息ぴったりだね。私たち」

「お前の行動パターンが読めてきたよ」

同じくワイヤーにつかまっていた、理子の下でため息をつく。

「ユーくん。我慢しなくても、上を見ていいんだよ。」

「俺は、強い男なんだッ」

理子は今スカートをはいで、俺の上にいる。つまり、俺が今上を向けば………

「早く上ってくれ………」

俺はそう言うのが精いっぱいだった。

満月

「ああ、いい夜だっ！ 硝煙のニオイがしてオトコもいる。宴にはもってこいだな。そう思うだろう？ ホームズ4世」

これは戦闘狂になった時の理子だ。心から戦いを楽しみ、血のにおいを求め、咆哮する。

「峰・理子・リュパン4世。今度こそ逮捕よ！ ママの冤罪償わせてやる！」

月下の屋上に2人の少女が交錯する。

互いに式丁拳銃を構え、視線を交らせる。

先に動いたのはアリアの方だった。低く地を蹴って、理子に肉薄する。

「キンジ！ アル〓カタ戦でいくわ！ 離れ際に援護しなさい！」

アリアが大声で叫ぶ。

「だ、そうですよ。キンジさん」

「やだよ。死にたくねえし」

この台詞は俺の横にいる、キンジのものである。

アリアが至近距離で弾丸を放つと、理子はバツ宇宙でひらりとかわす。

理子の銃弾がアリアのつま先をかすめれば、アリアの銃弾が、理子の髪をひと房落とす。

理子の体が華麗に宙を舞い、アリアは地を神速で駆ける。見ている者がほれぼれするような、一流のアル〓カタ戦。

「ふふっ アリアかわいいよアリア！」

理子は早口言葉のようにそう言って、殊更楽しそうに――笑う。

がががが、ガギンッ！

ついに、アリアのガバメントから弾切れの音、そして、予備の弾^{マガ}倉^{ジシ}ももうないらしい。

見ると、理子の方も、弾切れを起こしている。

そして、当然のように、2人同時に二本の小太刀とナイフを抜く。

――二刀流。

「あんたブサイクだから、今気付いたんだけど」

アリアが背を逸らし、無理やり理子を見下ろす形をとって言った。

「髪切ったのね」

「お前のせいだ。オルメス。テールが少し短くなった」

「あら、ごめんあそばせ」

「だまれチビ」

「ブス」

「チビチビ」

「ブスブスブス」

「チビチビチビチビ」

「ブスブスブうえっぺえ！」

アリアが下を噛んだところで、俺は隣のキンジに目くばせする。

「よろしく」

「おつよ」

さつきとは打って変わってやる気maxのキンジ。
2人がスカートなのも気にせず、派手なアルカタ戦を繰り広げ
たせいで、キンジはだいぶ前からヒスっていた。

バツ

再び2人が駆けだそうした瞬間、一つの影が、2人の間に割り込
んだ。

ガギンッ！

右手のベレッタで理子の小太刀を受け止め、
左手のバタフライ・ナイフでアリアの日本刀と鏢迫る。

「キンジ!？」

突然の闖入者にアリアは目を見開いて驚いている。

「哀しいよ……………」

低く憂いを帯びた声でキンジがしゃべり始める。

ほうっておくと、いつまでも喋り続ける大変面倒くさいやつにな
るので……………」

「そのへんにしとけ。2人とも」

俺が割り込ませてもらう。

「ちょっと！ 勇士！ 何で止めるのよ！ まさか……………アンタがこの女に手籠にされたの！？」

「……………いや。そうじゃなくて」

軽く凶星だったので、思わず答えるのに間が開いてしまった。

「じゃあどうということよ！？」

「キンジ」

俺は面倒なのでキンジに話を振る。

「アリア。俺はアリアを犯罪者にしたくないんだよ……………」

「？ どういうことよ」

アリアがとりあえずといったところで、ようやく2本の刃物を下ろしてくれる。

「司法取引、だろう？ 理子」

「あつたりー！！ さすがはきー君」

司法取引。

犯罪者の罪を軽くしたり、無かったことにする代わりに、その犯罪者から情報を引き出す。

アメリカではおなじみのこの制度は、公にはされていないが、日本でも普通に行われている。

「つまりつまりー。理子を逮捕したら不当逮捕になっちゃうんですよー」

「ウソよっ。そんな手にあたしが引つかかるとでも……………」

「でも、俺らには確認のしようがないだろう？」

アリアの台詞には俺がわりこませてもらう。

ていうか、司法取引にしろ、何にしろ、かなえさんの冤罪が一部晴れるのは変わらない。

でも、アリアとしてはその犯人を野放しつてのはやっぱり納得いかなえか。

「で、理子。俺らに話があるんだろう？」

俺はさりげなく話を振ってやる。これでアリアとしても、理子の話を聞かざるを得ない状況になる。

「実はね。きー君とアリアに頼みがあるんだよ」

「頼み」

「もちろん、タダでは言わないよ？」

「アリアには——最高裁でちゃんと証言してあげること。あとは、アリアのママの冤罪関係の犯人の情報でイ・ウーとのつながりがあるものは、提供してあげる」

すると、アリアはビクン！と体を硬直させ、わずかに緊張を含んだ面持ちになった。これは……かなりでかい。なんせ、イ・ウーの情報を漏らすというのは、理子の命がかかる行為。それだけ、情報の価値も大きい。

「きー君には……お兄さんの事かな？」

キンジもまた、顔が険しいものとなる。

「で？ 頼みつてのはなんなのよ。話だけでもきいてあげるわ」

アリアのその問いに理子は……

「きー君、アリア。一緒に……」

にやつ、と悪魔の微笑みを浮かべ、

「ドロボーやろうよ！」

過去への追憶

「おい、鈴音！ 鈴音EEEEEEEE！……！」

「おあつはよ……！！ りっこりんが帰ってきたよ
――！！」

翌日、理子は普通に教室に登校した。

交友が広い理子は、アリアのように、クラス内で孤立するなんてことは絶対にならない。

少年法により、容疑者の情報開示は固く禁じられている。

アリアは悔しそうに鉛筆バキバキ折ってるけどな。……怖ええよ。

さてさて昨日のあの騒動の後、結局個々の理由によって理子に協力せざるを得なくなって、寮に帰った後の、アリアの荒れようはそこそこひどいものだった。

「なんで私が犯罪の片棒をかつがなきゃならないのよ!」

一貫してこの主張である。

まああと、なんでキンジが理子に協力するのかと、アリアはキンジを問い詰めたりしていたが……

「そういや、なんでアンタも協力すんのよ？」

俺はそう聞かれ、言葉に詰まる。一瞬誤魔化そうかなとも考えたが、俺は重い口を開いた。

「貸しがあんだよ。あいつには」
「貸し？」

俺はキンジの方をちらつと見る。

キンジは複雑そうな表情で俺を見ていた。

「ああ。俺が鑑識科にいたことは知ってたんだろ？」

「ええ。でも元々強襲科なのよね？」

アリアは一通り、俺の経歴は調べたらしいし、おそらく理子の経歴も調べてあるんじゃないだろうか。

「俺と理子。キンジ、あと1人……まあ調べれば分かるだろうけど、すえなが すずね未永鈴音って子の四人。強襲科2人に、探偵科2人。で、パーティを組んで依頼に臨む事が多かった。一年の頃の話だ」

アリアはウンウンと頷きながら話を聞いている。この辺はおそらく調べてあるんだろうな。

「一年の夏休み直後の話だ。なんてことない依頼だった。マスターズのランク設定はC。俺たち四人のランクは、S・A・S・A。楽にこなせるはずだった。

依頼内容は政治家の会議場でのSP。警察の公安との協力警備だった。

俺たちは会議場での中での警備で、会議は予定の三時間の内、二時間経ったところだった。

俺は鈴音と話をしているときだった。突然、会場全体が激しい地

響きに巻き込まれた。俺たちはすぐさま拳銃を構え、圭かいたせいに入った。

ドアが勢い良く開いて、十人ほどの男が部屋になだれこんできた。部屋は瞬く間に銃撃戦になり、俺たちはマルヒをかばいながら、ひとりずつ、冷静に片づけていった。

……………その時だった。男の一人が俺に向かって銃を構えた。俺はその射線上から体をずらした。当然銃弾は横を抜けて、後ろの壁に当たって、
……………気付いた時には隣にいた、鈴音の後頭部から血しぶきが飛んで……………

兆弾だった。そっからの記憶はいまだに曖昧としている。

俺は頭が真っ白になって、
気付いたらいくつもの弾丸が俺に向かってきて、
その瞬間、理子に突き飛ばされて、
俺は気を失った。

テロ、だった。

犯人グループはヤクザ。

犯人グループは12人。

死亡者6人。逮捕されたのが5人。1人は、逃走したらしい。

俺は3カ月は安静の怪我。キンジ、理子ともに軽傷。そして鈴音は……………命をおとした。

俺は身体的、精神的疲労をとるために、鑑識科に異動した。」

俺が長い話を終えると、今まで黙って話を聞いていたアリアは

「……………そう」

とだけ言った。

下手な同情をされないだけありがたかった。

どうやら理子がドロボーしよう！ という家はイ・ウーのナンバ
ーツ。ブラドの家に母親の形見の品を取り返しに行く。というこ
とらしい。

屋上で昼寝をしていると、

ビーーーーーー

「うおっ」

今のは……ワイヤーの音？

のそのそと外壁まで移動して、下を見下ろすと、キンジが窓から
SWATのような動きで地面へと降りていた。

「キンちゃあーん！ 続きは星伽から帰ってきてからねー！ 続
き！ 約束だよー！？」

窓からは白雪がキンジに向かって叫んでいる！？ 何でアイツ上
着てねえんだ！？

俺も屋上にワイヤーをひっかけて、地面へと降りる。

「よお、キンジ」

「！ 勇士か」

「何事？」

「実は、カクカクシカジカで……………」

どうやら、簡単にまとめると、白雪が「既成事実ツ」と叫んで上はブラだけになってキンジに迫った。ということだそつだ。

…………… おおう。ちょっと…………… キツすぎねえか。白雪。

「ぜいたくな悩みだな。キンジ」

「なんか、嬉しいはずなのに、ピンチとしか思えなかったぞ。あの状況は」

ま、そいつはお前の体質だしな。

「このあとアキバだろ。ともに行こうぜ。親友」

「ああ…………… そうだな」

キンジは見るからにげっそりしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0329t/>

燃えよ魂 ～ 緋弾のエリア～

2011年11月17日19時34分発行